

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	学部の設置									
フリガナ設置者	ガッコウメイジョウ メイジョウガク									
フリガナ大学の名称	メイジョウガク 名城大学 (Meijo University)									
大学本部の位置	愛知県名古屋市中区塩釜一丁目501番地									
大学の目的	<p>本大学は、教育基本法及び学校教育法の規定するところに従い、学術の中心として、深く専門的教育研究を行い、合わせて広汎な教養を培い、創造的な知性と豊かな人間性を備えた有能な人材を養成するとともに学術・文化の進展に寄与することを目的とする。</p>									
新設学部等の目的	<p>外国語学部は、国際化の推進を理念とし、グローバル化が深化する世界において求められる実践的なコミュニケーション力を有し、国境を越えて活躍できる、以下に掲げる能力を備えた人材の養成を目的とする。</p> <p>①グローバル化社会の最前線で活躍できる英語の運用能力を有した人材 ②アジアをはじめとする海外の事情に通じ、異文化や国際社会に対して深い理解力を持った人材 ③日本の歴史、文化、社会を深く理解し、日本の立場や事情を世界に発信する能力を備え、グローバル化社会を切り開いて行くことができる人材</p>									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	外国語学部 [Faculty of Foreign Studies] 国際英語学科 [Department of English and International Studies] 計	年 4	人 130	年次人 -	人 520	学士(外国語学)	年 月 第 年次 平成 28 年 4 月 第 1 年次	愛知県名古屋市中区 矢田南四丁目 102 番 9		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	法学部 法学科 [定員増] (40) (平成 28 年 4 月) 法学部 応用実務法学科 (廃止) (△170) ※平成 28 年 4 月学生募集停止 大学院大学・学校づくり研究科 大学・学校づくり専攻 修士課程 (廃止) (△10) ※平成 28 年 4 月学生募集停止									
教育課程	新設学部等の名称			開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
	外国語学部 国際英語学科			講義 71 科目	演習 70 科目	実習 6 科目	計 147 科目	124 単位		
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等						兼任 教員等
				教授	准教授	講師	助教	計	助手	人
	新設分	外国語学部	国際英語学科	人 9 (8)	人 7 (6)	人 6 (6)	人 2 (2)	人 24 (22)	人 0 (0)	人 51 (24)
		計		9 (8)	7 (6)	6 (6)	2 (2)	24 (22)	0 (0)	- (-)
	既設分	法学部	法学科	28 (28)	8 (8)	1 (1)	1 (1)	38 (38)	0 (0)	118 (118)
		経営学部	経営学科	14 (14)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	100 (100)
国際経営学科			10 (10)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	34 (34)	
経済学部		経済学科	10 (10)	5 (5)	0 (0)	3 (3)	18 (18)	0 (0)	98 (98)	
	産業社会学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	12 (12)	0 (0)	25 (25)		

教員組織の概要	既設分	理工学部	理工学部	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
			数学科	9 (9)	6 (6)	1 (1)	3 (3)	19 (19)	0 (0)	41 (41)
			情報工学科	11 (11)	6 (6)	0 (0)	2 (2)	19 (19)	0 (0)	83 (83)
			電気電子工学科	12 (12)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	38 (38)
			材料機能工学科	7 (7)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	47 (47)
			応用化学科	5 (5)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	10 (10)	0 (0)	29 (29)
			機械工学科	7 (7)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	52 (52)
			交通機械工学科	7 (7)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	35 (35)
			メカトロニクス工学科	5 (5)	3 (3)	3 (3)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	43 (43)
			社会基盤デザイン工学科	6 (6)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	31 (31)
			環境創造学科	7 (7)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	49 (49)
			建築学科	6 (6)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	51 (51)
			教養教育等	9 (9)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	16 (16)	0 (0)	0 (0)
	農学部	農学部	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	
		生物資源学科	9 (9)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	65 (65)	
		応用生物化学科	7 (7)	4 (4)	0 (0)	2 (2)	13 (13)	0 (0)	51 (51)	
		生物環境科学科	7 (7)	4 (4)	1 (1)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	27 (27)	
		教養教育等	1 (1)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	
	薬学部	薬学科	28 (28)	20 (20)	0 (0)	18 (18)	66 (66)	1 (1)	67 (67)	
		教養教育等	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	
		分析センター	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	
	都市情報学部	都市情報学科	23 (23)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	27 (27)	0 (0)	30 (30)	
	人間学部	人間学科	11 (11)	6 (6)	0 (0)	3 (3)	20 (20)	0 (0)	86 (86)	
	教職センター		3 (3)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	35 (35)	
	総合研究所		1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	
	計	252 (252)	141 (141)	7 (7)	44 (44)	444 (444)	2 (2)	- (-)		
	合計	261 (260)	148 (147)	13 (13)	46 (46)	468 (466)	2 (2)	- (-)		

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体				
	事 務 職 員		212 (212)	142 (142)	354 (354)					
	技 術 職 員		7 (7)	3 (3)	10 (10)					
	図 書 館 専 門 職 員		7 (7)	2 (2)	9 (9)					
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	計		226 (226)	147 (147)	373 (373)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	借用地 【校舎敷地】 貸主：蒲郡市 借用面積： 200.00 ㎡ 借用期間： 平成16年6月1日から 25年10か月間				
	校 舎 敷 地	222,371.75 ㎡	0.00 ㎡	0.00 ㎡	222,371.75 ㎡					
	運 動 場 用 地	174,962.29 ㎡	0.00 ㎡	0.00 ㎡	174,962.29 ㎡					
	小 計	397,334.04 ㎡	0.00 ㎡	0.00 ㎡	397,334.04 ㎡					
	そ の 他	157,916.92 ㎡	0.00 ㎡	0.00 ㎡	157,916.92 ㎡					
合 計	555,250.96 ㎡	0.00 ㎡	0.00 ㎡	555,250.96 ㎡						
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計					
		234,545.45 ㎡ (227,515.36 ㎡)	0.00 ㎡ (0.00 ㎡)	0.00 ㎡ (0.00 ㎡)	234,545.45 ㎡ (227,515.36 ㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	176 室	135 室	223 室	29 室 (補助職員 9 人)	5 室 (補助職員 0 人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数						
		外国語学部 国際英語学科		19 室						
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 ※ 点	機械・器具 点	標本 点	届出学部全体 ※視聴覚資料は、 大学全体での共用分 大学全体での共用分 ・学術雑誌 〔4,241〕 ・電子ジャーナル 〔21,100〕		
	外国語学部 国際英語学科	93,208〔35,672〕 (90,700〔34,936〕)	35〔21〕 (35〔21〕)	2〔2〕 (2〔2〕)	26,947 (26,919)	34 (14)	0 (0)			
	計	93,208〔35,672〕 (90,700〔34,936〕)	35〔21〕 (35〔21〕)	2〔2〕 (2〔2〕)	26,947 (26,919)	34 (14)	0 (0)			
図書館		面積	閲覧座席数		収納可能冊数		大学全体			
		16,959.93 ㎡	1,850		1,677,547					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要					大学全体		
		10,136.24 ㎡	テニスコート		プール					
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次	届出学部全体 図書購入費には 電子ジャーナル 購入費用を含む
		教員 1 人当り研究費等		402 千円	408 千円	408 千円	408 千円	－ 千円	－ 千円	
		共同研究費等		3,600 千円	4,000 千円	4,000 千円	4,000 千円	－ 千円	－ 千円	
		図書購入費	33,560 千円	10,000 千円	10,000 千円	10,000 千円	10,000 千円	－ 千円	－ 千円	
	設備購入費	19,096 千円	5,000 千円	5,000 千円	5,000 千円	5,000 千円	－ 千円	－ 千円		
	学生 1 人当り 納付金	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次			
		1,390 千円	1,190 千円	1,190 千円	1,190 千円	－ 千円	－ 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金，資産運用収入，雑収入 等							

既設大学等の状況	大学の名称	名城大学							所在地		
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度			
	法学部	年	人	年次人	人		倍				
	法学科	4	360	—	1,440	学士(法学)	1.03	平成11年度			
	応用実務法学科	4	170	—	680	学士(法学)	1.07	平成11年度			平成28年4月から学生募集停止(応用実務法学科)
	経営学部						1.17				
	経営学科	4	195	—	780	学士(経営学)	1.16	平成12年度			
	国際経営学科	4	90	—	360	学士(経営学)	1.20	平成12年度			
	経済学部						1.12				
	経済学科	4	185	—	740	学士(経済学)	1.12	平成12年度			
	産業社会学科	4	100	—	400	学士(経済学)	1.13	平成12年度			
	理工学部						1.10				
	数学科	4	85	—	340	学士(理学)	1.07	平成12年度			・平成25年4月から応用化学科、メカトロニクス工学科設置。
	情報工学科	4	145	—	536	学士(工学)	1.08	平成16年度			・平成25年4月から機械システム工学科を機械工学科へ、建設システム工学科を社会基盤デザイン工学科へ名称変更。
	電気電子工学科	4	130	—	491	学士(工学)	1.05	平成12年度			・平成25年4月から入学定員を変更(電気電子工学科：145→130、材料機能工学科：95→65、機械工学科：145→120、交通機械工学科：130→110、社会基盤デザイン工学科：130→90、環境創造学科：95→90)
	材料機能工学科	4	65	—	262	学士(工学)	1.07	平成12年度			
	応用化学科	4	60	—	180	学士(工学)	1.02	平成25年度			
	機械工学科	4	120	—	461	学士(工学)	1.14	平成12年度			
	交通機械工学科	4	110	—	421	学士(工学)	1.09	平成12年度			
	メカトロニクス工学科	4	75	—	225	学士(工学)	1.15	平成25年度			
	社会基盤デザイン工学科	4	90	—	361	学士(工学)	1.09	平成12年度			
	環境創造学科	4	90	—	337	学士(工学)	1.01	平成12年度			
	建築学科	4	135	—	500	学士(工学)	1.16	平成12年度			
	工学系(1年次)	4	—	—	—	学士(工学)	—	平成12年度			・平成20年度入学試験から平成24年度入学試験まで、学科別及び数学科を除く8学科をひと括りとした「系別募集」を実施。(情報工学科44人、電気電子工学科44人、材料機能工学科28人、機械システム工学科44人、交通機械工学科39人、建設システム工学科39人、環境創造学科28人、建築学科40人)

既設 大 学 等 の 状 況	農学部						1.10				
	生物資源学科	4	100	—	400	学士(農学)	1.12	平成11年度			
	応用生物化学科	4	100	—	400	学士(農学)	1.13	平成11年度			
	生物環境科学科	4	100	—	400	学士(農学)	1.06	平成17年度			
	薬学部										
	薬学科(6年制)	6	250	—	1,500	学士(薬学)	1.09	平成18年度	愛知県名古屋 市天白区 八事山150 番地		
	都市情報学部										
	都市情報学科	4	200	—	800	学士 (都市情報学)	1.07	平成7年度	岐阜県可児 市虹ヶ丘四 丁目3番の3		
	人間学部										
	人間学科	4	200	—	800	学士 (人間学)	1.13	平成15年度	愛知県名古屋 市天白区 塩釜口一丁 目501番地		
	大 学 の 名 称	名城大学大学院									
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地		
		年	人	年次 人	人		倍				
	大学院法学研究科 法律学専攻										
	修士課程	2	15	—	30	修士(法学)	0.33	昭和42年度			
博士後期課程	3	8	—	24	博士(法学)	0.04	昭和44年度				
大学院経営学研究科 経営学専攻											
修士課程	2	20	—	50	修士(経営学)	0.74	平成13年度			平成27年4月から 経営学専攻修士課程の 入学定員を変更 (30→20)	
博士後期課程	3	3	—	9	博士(経営学)	0.44	平成15年度				
大学院経済学研究科 経済学専攻											
修士課程	2	10	—	20	修士(経済学)	0.20	平成12年度	愛知県名古屋 市天白区 塩釜口一丁 目501番地			
博士後期課程	3	3	—	9	博士(経済学)	0.11	平成14年度				
大学院理工学研究科 数学専攻											
修士課程	2	8	—	16	修士(理学)	0.37	平成14年度				
博士後期課程	3	2	—	6	博士(理学)	0.16	平成7年度				
情報工学専攻											
修士課程	2	30	—	60	修士(工学)	0.79	平成14年度				
電気電子工学専攻											
修士課程	2	20	—	40	修士(工学)	1.55	平成14年度				
材料機能工学専攻											
修士課程	2	30	—	60	修士(工学)	1.23	平成14年度				

既設 大学等 の 状 況	機械システム工学専攻 修士課程	2	20	—	40	修士(工学)	1.95	平成14年度	愛知県名古屋 市天白区 塩釜口一丁 目501番地	
	交通機械工学専攻 修士課程	2	16	—	32	修士(工学)	1.09	平成14年度		
	建設システム工学専攻 修士課程	2	20	—	40	修士(工学)	0.55	平成14年度		
	環境創造学専攻 修士課程	2	10	—	20	修士(工学)	0.20	平成14年度		
	建築学専攻 修士課程	2	16	—	32	修士(工学)	0.78	平成14年度		
	電気電子・情報・材料工学専攻 博士後期課程	3	10	—	30	博士(工学)	0.40	平成5年度		
	機械工学専攻 博士後期課程	3	5	—	15	博士(工学)	0.26	平成4年度		
	社会環境デザイン工学専攻 博士後期課程	3	5	—	15	博士(工学)	0.20	平成4年度		
	大学院農学研究科 農学専攻 修士課程	2	20	—	40	修士(農学)	1.02	昭和48年度		
	博士後期課程	3	5	—	15	博士(農学)	0.13	昭和51年度		
	大学院薬学研究科 薬学専攻 博士課程(4年制)	4	4	—	16	博士(薬学)	1.81	平成24年度	愛知県名古屋 市天白区 八事山150 番地	
	大学院都市情報学研究科 都市情報学専攻 修士課程	2	8	—	16	修士 (都市情報学)	0.99	平成11年度	岐阜県可児 市虹ヶ丘四 丁目3番の3	
	博士後期課程	3	4	—	12	博士 (都市情報学)	0.41	平成13年度		
	大学院人間学研究科 人間学専攻 修士課程	2	8	—	16	修士(人間学)	0.18	平成23年度	愛知県名古屋 市天白区 塩釜口一丁 目501番地	

既設 大学等 の 状 況	大学院総合学術研究科 総合学術専攻										
	博士前期課程	2	8	—	16	修士(学術)	0.24	平成14年度			
	博士後期課程	3	4	—	12	博士(学術)	0.25	平成14年度			
	大学院大学・学校づくり研究科 大学・学校づくり専攻								愛知県名古屋 市天白区 塩釜口一丁 目501番地	平成28年4月から 学生募集停止	
修士課程	2	10	—	20	修士 (教育経営)	0.45	平成18年度				
大学院法務研究科 法務専攻										平成27年4月から 入学定員を変更 (40→25)	
	専門職学位課程	3	25	—	105	法務博士 (専門職)	0.22	平成16年度			
	附属施設の概要	該当なし									

学校法人名城大学 設置認可等に関わる組織の移行表

平成27年度		入学 定員	編入学 定員	収容 定員	→	平成28年度		入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
名城大学						名城大学					
法学部	法学科	360	—	1440		法学部	法学科	<u>400</u>	—	<u>1600</u>	定員変更 平成28年4月 学生募集停止
	応用実務法学科	170	—	680				<u>0</u>	—	<u>0</u>	
経営学部	経営学科	195	—	780		経営学部	経営学科	195	—	780	
	国際経営学科	90	—	360			国際経営学科	90	—	360	
経済学部	経済学科	185	—	740		経済学部	経済学科	185	—	740	
	産業社会学科	100	—	400			産業社会学科	100	—	400	
理工学部	数学科	85	—	340		理工学部	数学科	85	—	340	
	情報工学科	145	—	580			情報工学科	145	—	580	
	電気電子工学科	130	—	520			電気電子工学科	130	—	520	
	材料機能工学科	65	—	260			材料機能工学科	65	—	260	
	応用化学科	60	—	240			応用化学科	60	—	240	
	機械工学科	120	—	480			機械工学科	120	—	480	
	交通機械工学科	110	—	440			交通機械工学科	110	—	440	
	メカトロニクス工学科	75	—	300			メカトロニクス工学科	75	—	300	
	社会基盤デザイン工学科	90	—	360			社会基盤デザイン工学科	90	—	360	
	環境創造学科	90	—	360			環境創造学科	90	—	360	
	建築学科	135	—	540			建築学科	135	—	540	
	農学部	生物資源学科	100	—	400		農学部	生物資源学科	100	—	400
応用生物化学科		100	—	400			応用生物化学科	100	—	400	
生物環境科学科		100	—	400			生物環境科学科	100	—	400	
薬学部	薬学科（6年制）	250	—	1500		薬学部	薬学科（6年制）	250	—	1500	
都市情報学部	都市情報学科	200	—	800		都市情報学部	都市情報学科	200	—	800	
人間学部	人間学科	200	—	800		人間学部	人間学科	200	—	800	
計		3155	—	13120		外国語学部	国際英語学科	<u>130</u>	—	<u>520</u>	学部の設置 (届出)
						計		3155	—	13120	
名城大学大学院						名城大学大学院					
法学研究科	法律学専攻 (M)	15	—	30		法学研究科	法律学専攻 (M)	15	—	30	
	法律学専攻 (D)	8	—	24			法律学専攻 (D)	8	—	24	
経営学研究科	経営学専攻 (M)	20	—	40		経営学研究科	経営学専攻 (M)	20	—	40	
	経営学専攻 (D)	3	—	9			経営学専攻 (D)	3	—	9	
経済学研究科	経済学専攻 (M)	10	—	20		経済学研究科	経済学専攻 (M)	10	—	20	
	経済学専攻 (D)	3	—	9			経済学専攻 (D)	3	—	9	
理工学研究科	数学専攻 (M)	8	—	16		理工学研究科	数学専攻 (M)	8	—	16	
	数学専攻 (D)	2	—	6			数学専攻 (D)	2	—	6	
	情報工学専攻 (M)	30	—	60			情報工学専攻 (M)	30	—	60	
	電気電子工学専攻 (M)	20	—	40			電気電子工学専攻 (M)	20	—	40	
	材料機能工学専攻 (M)	30	—	60			材料機能工学専攻 (M)	30	—	60	
	機械システム工学専攻 (M)	20	—	40			機械システム工学専攻 (M)	20	—	40	
	交通機械工学専攻 (M)	16	—	32			交通機械工学専攻 (M)	16	—	32	
	建設システム工学専攻 (M)	20	—	40			建設システム工学専攻 (M)	20	—	40	
	環境創造学専攻 (M)	10	—	20			環境創造学専攻 (M)	10	—	20	
	建築学専攻 (M)	16	—	32			建築学専攻 (M)	16	—	32	
	電気電子・情報・材料工学専攻 (D)	10	—	30			電気電子・情報・材料工学専攻 (D)	10	—	30	
	機械工学専攻 (D)	5	—	15			機械工学専攻 (D)	5	—	15	
	社会環境デザイン工学専攻 (D)	5	—	15			社会環境デザイン工学専攻 (D)	5	—	15	
	農学研究科	農学専攻 (M)	20	—	40		農学研究科	農学専攻 (M)	20	—	40
農学専攻 (D)		5	—	15			農学専攻 (D)	5	—	15	
薬学研究科	薬学専攻 (D)（4年制）	4	—	16		薬学研究科	薬学専攻 (D)（4年制）	4	—	16	
都市情報学研究科	都市情報学専攻 (M)	8	—	16		都市情報学研究科	都市情報学専攻 (M)	8	—	16	
	都市情報学専攻 (D)	4	—	12			都市情報学専攻 (D)	4	—	12	
人間学研究科	人間学専攻 (M)	8	—	16		人間学研究科	人間学専攻 (M)	8	—	16	
総合学術研究科	総合学術専攻 (M)	8	—	16		総合学術研究科	総合学術専攻 (M)	8	—	16	
	総合学術専攻 (D)	4	—	12			総合学術専攻 (D)	4	—	12	
大学・学校づくり研究科	大学・学校づくり専攻 (M)	10	—	20		大学・学校づくり研究科	大学・学校づくり専攻 (M)	<u>0</u>	—	<u>0</u>	平成28年4月 学生募集停止
法務研究科	法務専攻 (P)	25	—	75		法務研究科	法務専攻 (P)	25	—	75	
計		347	—	776		計		<u>337</u>	—	<u>756</u>	

教育課程等の概要																
(外国語学部国際英語学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
教養教育部門	基軸科目	現代に生きる	1前	2			○			2				兼1	オムニバス	
	人間を考える	歴史と文化	1・2・3・4前	2			○			1				兼1	オムニバス	
		芸術と人間	1・2・3・4後	2			○							兼1		
		哲学	2・3・4前	2			○							兼1		
		心の科学	2・3・4後	2			○							兼1		
		文化人類学	2・3・4後	2			○			1				兼1		
	社会に生きる	日本国憲法	1・2・3・4前	2			○							兼1	オムニバス	
		経済学	1・2・3・4前	2			○							兼1		
		市民と社会	1・2・3・4後	2			○							兼1		
		ジェンダーと社会	2・3・4前	2			○							兼1		
		科学と技術の歩み	2・3・4後	2			○							兼1		
	自然と生きる	海外留学入門	1・2・3・4前	2			○			1	1			兼1	オムニバス	
		人間と自然	1・2・3・4前	2			○							兼1	オムニバス	
		地球と宇宙	1・2・3・4後	2			○							兼1		
情報科目	人間と自然	2・3・4前	2			○							兼1			
	生命の多様性	2・3・4後	2			○							兼1			
	数と論理	2・3・4後	2			○							兼1			
科目教	コンピュータリテラシー	1・2・3・4前	2			○							兼1			
	ウェブデザイン	1・2・3・4後	2			○							兼1			
	情報社会と倫理	1後	2			○							兼1			
科目育	健康・スポーツ科学Ⅰ	1前	1					○					兼2			
	健康・スポーツ科学Ⅱ	1後	1					○					兼2			
キャリア教育科目	キャリア形成論	2・3・4前	2			○							兼1			
	インターンシップ	2・3・4前	2					○	1				兼1	集中		
	日本とグローバル人材	1・2・3・4後	2			○			1				兼1			
	小計（24科目）	—	2	44			—		5	1	0	0	0	兼19		
専門教育部門	第一外国語科目	英語コミュニケーションⅠ（基礎1）	1前	2			○			2	6	1		兼1		
		英語コミュニケーションⅡ（基礎2）	1後	2			○			2	6	1		兼1		
		英語コミュニケーションⅢ（応用1）	2前	2			○			2	5	1		兼1		
		英語コミュニケーションⅣ（応用2）	2後	2			○			2	5	1		兼1		
		英語コミュニケーションⅤ（発展）	3前	2			○			1	6	1		兼1		
		英語リーディングⅠ（基礎1）	1前	1			○			2	4	1		兼2		
		英語リーディングⅡ（基礎2）	1後	1			○			2	4	1		兼2		
		英語リーディングⅢ（応用1）	2前	1			○			1	1	3		兼4		
		英語リーディングⅣ（応用2）	2後	1			○			1	1	3		兼4		
		英語リーディングⅤ（発展）	3後	1			○			1	1	6		兼1		
		英語ライティングⅠ（基礎1）	1前	1			○			1	1	2	1		兼4	
		英語ライティングⅡ（基礎2）	1後	1			○			1	1	2	1		兼4	
		英語ライティングⅢ（応用1）	2前	1			○			1	3	1		兼4		
		英語ライティングⅣ（応用2）	2後	1			○			1	3	1		兼4		
		英語ライティングⅤ（発展）	3後	1			○			1	1	6		兼1		
		英語ディスカッションⅠ（基礎1）	1前	1			○			1	1	2	1		兼5	
		英語ディスカッションⅡ（基礎2）	1後	1			○			1	2	1			兼5	
		英語ディスカッションⅢ（応用1）	2前	1			○			2	3				兼4	
		英語ディスカッションⅣ（応用2）	2後	1			○			2	3				兼4	
		パブリック・スピーキング	3前	1			○			2	3	1			兼3	
		ディベート	3後	1			○			2	3	1			兼3	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
外国語科目群	第二外国語科目	中国語入門Ⅰ	2前	1			○			1					兼	
		中国語入門Ⅱ	2前	1			○			1					兼	
		中国語初級Ⅰ	2後	1			○			1					兼	
		中国語初級Ⅱ	2後	1			○			1					兼	
		中国語中級Ⅰ	3前	1			○			1					兼	
		中国語中級Ⅱ	3前	1			○			1					兼	
		中国語応用Ⅰ	3後	1			○			1					兼	
		中国語応用Ⅱ	3後	1			○			1					兼	
		韓国語入門Ⅰ	2前	1				○			1					
		韓国語入門Ⅱ	2前	1				○			1					
		韓国語初級Ⅰ	2後	1				○			1					
		韓国語初級Ⅱ	2後	1				○			1					
		韓国語中級Ⅰ	3前	1				○			1					
		韓国語中級Ⅱ	3前	1				○			1					
		韓国語応用Ⅰ	3後	1				○			1					
		韓国語応用Ⅱ	3後	1				○			1					
		フランス語入門Ⅰ	2前	1				○								兼
		フランス語入門Ⅱ	2前	1				○			1					兼
		フランス語初級Ⅰ	2後	1				○								兼
		フランス語初級Ⅱ	2後	1				○			1					兼
		フランス語中級Ⅰ	3前	1				○								兼
		フランス語中級Ⅱ	3前	1				○			1					兼
		フランス語応用Ⅰ	3後	1				○								兼
		フランス語応用Ⅱ	3後	1				○			1					兼
		スペイン語入門Ⅰ	2前	1				○								兼
		スペイン語入門Ⅱ	2前	1				○								兼
		スペイン語初級Ⅰ	2後	1				○								兼
		スペイン語初級Ⅱ	2後	1				○								兼
	スペイン語中級Ⅰ	3前	1				○								兼	
	スペイン語中級Ⅱ	3前	1				○								兼	
	スペイン語応用Ⅰ	3後	1				○								兼	
	スペイン語応用Ⅱ	3後	1				○								兼	
	小計 (53科目)		—	26	32			—		4	7	6	2	0	兼17	
	専門基礎科目群	英語学概論	英語学概論	1前	2			○			1					兼
			英米文学概論	1前	2			○				1				オムニバス
			異文化理解	1後	2			○			2					オムニバス
		選択必修科目群 ①	英語音声学	1後		2			○			1				
			英語の構造と仕組み	2前		2			○			1				
			コミュニケーションのための英文法	2後		2			○			1				
			イギリス文学研究	2前		2			○							兼
			アメリカ文学研究	2後		2			○			1				
			インタラクティブ・イングリッシュⅠ	2前		2				○		2		1		
			インタラクティブ・イングリッシュⅡ	2後		2				○		2		1		
			異文化コミュニケーション	2前		2				○		1				
		多文化共生論	2後		2				○		1					
		選択必修科目群 ②	日本中世近世史	1後		2				○						兼
			日本文学研究	2後		2				○		1				
			日本の伝統文化	2前		2				○		1				
			日本の先端文化	2後		2				○						兼
			アジアを学ぶ	1前	2					○		1				
		地域研究論	1後		2				○		1					
	小計 (18科目)		—	8	28			—		6	4	0	1	0	兼3	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育部門	専門基幹科目群 選択必修科目枠	アカデミック・イングリッシュⅠ	1後	2			○			2						
		アカデミック・イングリッシュⅡ	2前	2			○			2						
		メディア・イングリッシュⅠ	3前	2			○			1			1			
		メディア・イングリッシュⅡ	3後	2			○			1			1			
		英語の拡がりと多様性	3後	2						1						
		第二言語習得論	2前	2			○			1						
		英語科教育法Ⅰ	2前	2			○			1						
		英語科教育法Ⅱ	2後	2			○			1						
		アメリカ地域研究	2前	2			○			1						兼
		イギリス地域研究	2後	2			○				1					兼
		中国地域研究	2前	2			○				1					兼
		韓国地域研究	2後	2			○			1						兼
		ベトナムの言語と文化Ⅰ	3前	2			○				1					兼
	ベトナムの言語と文化Ⅱ	3後	2			○				1					兼	
	タイの言語と文化Ⅰ	3前	2			○			1						兼	
	タイの言語と文化Ⅱ	3後	2			○			1						兼	
	インドネシアの言語と文化Ⅰ	3前	2			○				1					兼	
	インドネシアの言語と文化Ⅱ	3後	2			○				1					兼	
	国際フィールドワークⅠ(英語圏)	3前	4					○	1						※講義	
	国際フィールドワークⅡ(非英語圏)	3後	4					○	1						※講義	
	海外研修	2前	4					○	1						※講義	
	専門展開科目群	日本近現代史	2前	2			○			1						兼
		日本の宗教	2後	2			○									兼
		日本の経済	2前	2			○			1						兼
		日本の政治	2後	2			○			1						兼
		現代の日本社会	3後	2			○									兼
		パブリックリレーションズ	2前	2			○									兼
		仏教文化論	2前	2			○									兼
		キリスト教文化論	2前	2			○									兼
		イスラム教文化論	2後	2			○									兼
小計(30科目)		—	2	64			—		5	4	0	1	0	兼8	集中	
ゼミナール		英語通訳演習	3・4後	2				○								兼
		ビジネス英語	3・4前	2				○								兼
		英語プレゼンテーション	3・4前	2				○			1		2			兼
	英語科指導法Ⅰ	3前	2			○			1						兼	
	英語科指導法Ⅱ	3後	2			○			1						兼	
	日本のものづくり	3・4前	2			○									兼	
	日本のツーリズム	3・4後	2			○			1						兼	
	国際関係論	3・4前	2			○			1						兼	
	国際経済論	3・4後	2			○									兼	
	近現代の日中関係	3・4後	2			○									兼	
	近現代の日韓関係	3・4前	2			○									兼	
	アセアン事情	3・4前	2			○			1						兼	
	南アジア事情	3・4後	2			○			1						兼	
ヨーロッパの文学と社会	3・4後	2			○			1						兼		
小計(14科目)	—	0	28			—		4	2	0	2	0	兼6			
合計(147科目)	—	50	200			—		9	7	6	2	0	兼51			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置				備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	
学位又は称号		学士（外国語学）		学位又は学科の分野			文学関係						
卒業要件及び履修方法						授業期間等							
大学に4年以上在学し、次に定める方法で、124単位以上修得しなければならない。 (1) 教養教育部門から必修2単位、選択22単位、計24単位以上、 (2) 専門教育部門の外国語科目群から計30単位（第一外国語科目から必修26単位、第二外国語科目から1言語を選択して4単位[各言語「入門Ⅰ・Ⅱ」、「初級Ⅰ・Ⅱ」]）以上、 (3) 専門教育部門の専門基礎科目群から必修8単位、選択必修科目枠①から10単位以上、選択必修科目枠②から4単位以上、 (4) 専門教育部門の専門基幹科目群から必修2単位、選択必修科目枠から8単位以上、 (5) 専門教育部門のゼミナール科目群から必修12単位、 (6) 専門教育部門の専門基礎科目群、専門基幹科目群、専門展開科目群、ゼミナール科目群から計16単位以上、 (7) 教養教育部門、専門教育部門から計10単位以上 (履修科目の登録上限:46単位(年間))						1 学年の学期区分		2学期					
						1 学期の授業期間		15週					
						1 時限の授業時間		90分					

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教 育 課 程 等 の 概 要																
(人間学部人間学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
基軸科目	現代に生きる	1前		2		○			2	1				兼9	オムニバス	
	人間と文化	歴史と文化	1・2前・後	2		○			1					兼1		
		文学と人間	1・2前・後	2		○								兼1		
		芸術文化論	1・2前	2		○								兼1		
		欧米文化論	1・2前・後	2		○								兼2		
		アジア文化論	1・2後	2		○								兼1		
		文化人類学の世界	1・2後	2		○								兼1		
		哲学	1・2前	2		○								兼1		
		宗教の世界	1・2後	2		○								兼1		
人間と社会		日本国憲法	1・2前	2		○								兼1		
		法と社会	1・2後	2		○								兼1		
		経済と社会	1・2前	2		○								兼1		
		政治と社会	1・2後	2		○								兼1		
		社会学	1・2後	2		○								兼1		
		都市と人間	1・2前	2		○								兼1		
		ジェンダーと社会	1・2後	2		○								兼1		
自然と環境		地球と宇宙	1・2後	2		○								兼1		
		物質の成り立ち	1・2前	2		○								兼1		
		生命の多様性	1・2後	2		○								兼1		
		数と論理	1・2後	2		○								兼1		
		人間とデザイン	1・2後	2		○			1					兼1		
教養教育部門	言語コミュニケーション	英語基礎Ⅰ(コミュニケーション)	1前	1			○		2				1	兼7		
		英語基礎Ⅱ(コミュニケーション)	1前	1			○			1			1	兼6		
		英語初級ⅠーⅠ(コミュニケーション)	1後	1			○		2	1				兼7		
		英語初級ⅠーⅡ(コミュニケーション)	1後	1			○			1			1	兼6		
		英語初級ⅡーⅠ(コミュニケーション)	2前	1			○		1	1			1	兼		
		英語初級ⅡーⅡ(コミュニケーション)	2前	1			○		1	1			1	兼		
		英語中級Ⅰ(コミュニケーション)	2後	1			○			1			1	兼		
		英語中級Ⅱ(コミュニケーション)	2後	1			○			1			1	兼		
		フランス語入門Ⅰ	1前		1			○							兼1	
		フランス語入門Ⅱ	1前		1			○							兼1	
		フランス語応用Ⅰ	1後		1			○							兼1	
		フランス語応用Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		ドイツ語入門Ⅰ	1前		1			○							兼1	
		ドイツ語入門Ⅱ	1前		1			○							兼1	
		ドイツ語応用Ⅰ	1後		1			○							兼1	
		ドイツ語応用Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		中国語入門Ⅰ	1前		1			○							兼1	
		中国語入門Ⅱ	1前		1			○							兼1	
		中国語応用Ⅰ	1後		1			○							兼1	
		中国語応用Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		ハンブル入門Ⅰ	1前		1			○							兼1	
		ハンブル入門Ⅱ	1前		1			○							兼1	
		ハンブル応用Ⅰ	1後		1			○							兼1	
		ハンブル応用Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		スペイン語初級Ⅰ	1前		1			○							兼1	
		スペイン語初級Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		情報技術		コンピュータリテラシー	1前		2		○							兼2
				情報活用リテラシー	1後		2		○							兼2
	情報処理入門		2前		2		○							兼1		
	情報社会と倫理		1前		2		○					1				
健康とスポーツ科学		健康・スポーツ科学Ⅰ	1前		1								○	兼3		
		健康・スポーツ科学Ⅱ	1後		1								○	兼3		
教養演習	教養演習	1・2前・後		2			○							兼2		
キャリア・デザイン	キャリア形成論	1前		2			○							兼1		
小 計 (55科目)		—		10	72	0		—	6	2	0	2	0	兼58		

授 業 科 目 の 概 要

(外国語学部国際英語学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養教育部門 基礎科目 人間を考える 発展科目	現代に生きる	<p>現代について正しく理解することは、将来の自分のあり方を見出す手がかりとなる。本講義は、社会科学、人文科学、自然科学の分野における現代社会が直面している様々な課題について学びながら、学習への動機づけを促し、自ら学ぶ意欲を醸成するとともに、外国語学部の教養教育の導入として、基礎的なものごとの捉え方や考え方を身につけ、主体的な学びの礎を養うことを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (1 K.K.U. Ananda Kumara /5回) グローバル化時代において活躍できる人材となるために、自らがどのような考えを持ち、どのように学習すべきなのかを理解することを目的とする。日本及び外国社会の最近の経済・社会動向を紹介し、これからどのような形でグローバル化が進むのかについて議論を行いながら、履修者自身の心構え、得るべき知識や能力についても具体的にアドバイスをを行う。履修者との対話型授業として行う予定である。</p> <p>(6 岩井 眞実 /5回) 私たちの身のまわりには、数々の習俗・通過儀礼・祭礼・芸能といった伝統文化が存在する。通常、私たちはこれらをほとんど意識することなく現代を生活しているが、伝統文化の支えなしに現代を生きることもまた不可能である。本講義では、現代社会に潜在する伝統文化の諸相を物心両面において深く理解し、多面的なものの考え方を涵養することを目的とする。</p> <p>(31 大野 栄治 /5回) 温暖化の影響が世界各地で顕在化しつつあり、日本でも多くの人々が集中豪雨や熱中症などに見舞われるようになってきている。一方、日本列島近海では地震エネルギーが溜まり、連動型超巨大地震のリスクが高まっている。本講義では、自然災害の発生メカニズムを解説するとともに、このような地域に生きる日本人の知恵を紹介する。</p>	オムニバス方式
	歴史と文化	<p>歴史家の述べる「史実」と、これを題材とした文芸・芸能との関係について学ぶ。「史実」がどのような史料をもとに形成されるかを検証し、さらにこれを文芸・芸能がどのような手続き・手法で作品化するかについて学ぶ。具体的には、いわゆる「忠臣蔵事件」(元禄赤穂事件)と、これを劇化した「忠臣蔵」を中心的題材とする。その分析を通して、文芸・芸能が「史実」の先にある「真実」に至る過程を学び、あわせて日本人の精神史について深く理解することが目的である。</p>	
	芸術と人間	<p>絵画、建築、庭園、映画、パブリックアートなど視覚芸術の例を数々見ながら、芸術と表現者および社会との関係について解説する。芸術とは何か、そもそも定義は一律である必要はない。芸術とそうでないものとを、どう分けるべきか。例えば、表現者がこれは芸術であると言えば、それが芸術になる訳ではない。授業を進行していくにあたり、芸術と自分自身との関係について、自分なりの見方、あるいは、探求の仕方について考えをもつことができるようになることを目的とする。</p>	
	哲学	<p>人間は、何に対しても「それはなぜ?」、「どうしてそうなのか?」と疑問を持ち、理解したがる。幼い子供が親に対して「どうして」という疑問を繰り返すのも、人間の本能的な“知りたがり”の現れである。この探究心がすべての科学の出発点になった。哲学は個々の人間が作る社会や国家の根本に遡り、なぜそうであり、こうではないのかを問おうとする。納得できたとき、人々には新しい視野が広がり、更に深く知ろうとする。知的探求の積み重ねの基礎を身につけ、その深い意義を理解することが目的である。</p>	
	心の科学	<p>心理学はこころの働きについての科学であり、行動を理解しようとする学問である。俗説や思い込みではなく、客観性を志向する研究活動により得られた成果を紹介しながら、こころにかかわるトピックス、すなわち環境の知覚、学習と記憶、他者の印象形成、他者への同調、性格と適応、乳幼児の発達を解説し、また心理学の歴史と研究法を概説する。心理学の基本的な知識や考え方を理解して説明でき、こころの働きへの関心を高めてさらに探究し理解しようとする姿勢を育むことを目的とする。</p>	
文化人類学	<p>文化人類学とは、人間の文化的側面を探究する学問である。文化的側面には、伝統的な儀礼や信仰のほか、経済活動や近代科学、医療行為なども含めることができ、そうした多様な事象について相対主義的に理解することはグローバルな現代世界を生きる上で不可欠である。世界の民族の文化・社会状況について記述したエスノグラフィを参照しながら、私たちと彼らの日常世界を緻密に観察し比較することで、個々の文化がもつ独自の論理を見出す視角を身につけることが目的である。</p>		

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会に 生きる	日本国憲法	日本国憲法は日本国の最高法規であって、憲法に反するどのような法律、どのような行為も無効である。日本の統治機構の基本的仕組みや、基本的人権の保障等を中心として学習することを通じて、日本の基本法としての日本国憲法について理解をする。具体的には、憲法とは何か、象徴天皇制、平和主義、選挙制度と政党、国会、内閣、裁判所、地方自治、人権、幸福追求権、法の下での平等、自由権、社会権、参政権等について解説を加えていく。日本国憲法における基本事項を理解することを目的とする。	
	経済学	グローバル化する国際社会にあつて、日本と世界の現状を把握することは、将来、社会へと出ていく学生にとって、必須の課題である。その際、現状把握のための分析力を涵養する上で、経済学は重要なツールとなる。そこで、経済学の基本から解き明かし、現代が抱える諸課題に取り組むための道筋を学生と共に考える。経済は人間の営みの結果であり、最新の経済学は、そうした人間の営みを心理学の面からも分析するようになっている。経済学の学問としての面白さにも目覚めてもらうことも目的とする。	
	市民と社会	近代の社会は、自由意志と責任を持ち、かつ法の下で平等な市民によって形成され発展してきた。しかし、自由意志、責任、法の下での平等という枠組は、一朝一夕に出現したものではなく、様々な過程を経て成立したものであり、自由、責任、平等の間の関係や、市民同士の関係、市民と政府の関係、政治制度や法制度などの内容は、時とともに、また、新たな課題が登場することに複雑に絡み合いながら展開を続けている。この科目は、これらの社会に現れる諸現象を理解するにあたっての基本を学ぶことを目的とする。	
	ジェンダーと 社会	現代社会におけるジェンダー問題を考察し、ジェンダー概念の理解、ジェンダー視点から見た社会認識を培う。女性学の中から、ジェンダー概念が提起され、男性学やジェンダーの社会理論につながる過程を解説するとともに、家族、労働、子育て、教育、メディアなど、具体的な諸領域の中でのジェンダー関係のあり方を検討する中で、ジェンダーを差異化するメカニズムを捉えていく。女性の地位向上やジェンダー規範を見直すこれまでの社会的取り組みをふまえ、今後のジェンダー平等社会のあり方について、基本的な理解を深め、考察することを目的とする。	
	科学と技術の 歩み	愛知県のものづくりとも深く関わる産業技術を主要な対象として、それらがいかなる科学理論に支えられ、また産業技術の発展が科学の進歩にどのように貢献してきたのかを概観する。まずは近代科学理論と産業革命との密接な関係をはじめとして、科学と技術とが相互に影響しあい、お互いの発展を促進しあってきた関係を一般論として理解する。その上で、自らの言葉で、日本や愛知のものづくりにおける科学と技術の特徴を発信できるようになることを目的とする。	
海外留学入門	<p>海外での異文化体験は、視野を広げ多面的なものの見方を身につけることを可能とする。また、海外では自分のこと、自国のことを説明できるコミュニケーション能力が普段に増して求められる。留学や海外研修の成果を高めるために、事前に知っておくべき事項について解説するとともに、現地で頻繁に必要な英語表現について学ぶ。また、日本とは異なる環境の中での安全確保についても併せて学ぶ。海外での生活を通し、現地の文化、社会、人々などに触れ合いながら国際感覚を養い、異文化体験を最大限に活かすための基礎知識を身につけることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (10 Gregory John Minehane /8回) 海外でのマナー、習慣について日本と比較しながら学ぶとともに、日常生活に必要な英会話など実践的英語を習得する。 (3 村田 泰美 /7回) 自分の身の回りについて英語で説明ができるように準備をする。また留学先の現地事情を調査し、場所についての基本情報を得る。</p>	オム ニバ ス方 式	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自然と生きる	人間と自然	<p>産業革命以来、人間は便利で快適な生活を追求してきた。その結果、様々な環境問題を引き起こし、地球環境を悪化させている。また、異常気象が多発し、これまで以上に我々の生命を脅かす自然災害が増えている。持続可能な社会を構築するために生活のあり方が問われている。特に、人口が密集する都市が自然の中でどうあるべきかという命題に取り組む時期といえる。本講座では、我々人間が自然とどう共存していくかを、関連する問題を認識した上で、持続可能な社会を構築するための対策を学ぶことを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (27 垣鏑 直 /8回) ヒトの五感に注目し、様々な環境要因(ストレス)と反応に関する基礎を学ぶ。さらに、生気象学の基礎を理解し、生活環境がどうあるべきかを考察することで、自然と人間の関わり方を考える。 (37 谷口 義則 /7回) 生物の進化および自然の階層を理解した上で、人が生態系に及ぼす影響等を学ぶ。人は自然の一部と捉えて良いのか?この問いかけに対する考察を深化することで、私たち人が自然に対して取るべき態度を考える。</p>	オムニバス方式
	地球と宇宙	<p>我々は豊かな暮らしを手に入れるとともに、様々な環境問題にも直面している。環境問題を理解して解決に導き、本当の意味での豊かな暮らしをするためには、我々が暮らす地球を理解することが不可欠である。また、地球を理解するためには、宇宙の中での地球の位置づけを知る必要がある。「地圏」・「水圏」・「気圏」・「宇宙の中の地球」について概要を講義し、それぞれの関連性についても触れる。一連の講義を通じて地球全体について理解し、「地球観」を養うことを目的とする。</p>	
	生命の多様性	<p>地球46億年の歴史を経て形成された生命の多様性は、その総体として「生物多様性」という言葉で表現される。生物多様性は種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含むと定義されるが、人間は、これら生物多様性のもたらす恩恵を受けて日々生活している。生物多様性は人間生活の基盤であるが、近年、人為による開発や生態系の破壊によって、深刻な危機に直面している。本授業では、今後も人間生活の基盤である生物多様性を守り、それらを次世代に引き継いでいくために、生物多様性の意義や理解を深めることを目的とする。</p>	
	数と論理	<p>日常生活における身近な現象だけでなく経済や環境などの地球規模の現象の把握、さらに、近年ではインターネットや携帯通信などの情報処理において、数学が果している役割は多大であり、数学的視点から得られる知見が、現象の解明や技術の発展に大きく貢献していることはいうまでもない。本科目では、いろいろな興味深い例をとり上げながら、それらを数学的・数理的なアプローチによって把握する方法とその意義について教授し、種々の問題に対して論理的に対処する能力を養成することを目的とする。</p>	
情報教育科目	コンピュータリテラシー	<p>情報機器を操作する能力、情報ネットワークを活用し、情報を収集、整理、加工、分析し、発信できる能力を育成する。パソコンの基本操作とインターネット、文書作成、表計算など基本ソフトウェアの機能および使い方について学ぶとともに、ハードウェアおよび情報ネットワークの基本的な知識を習得する。情報社会で生きていく上で必要となる基本的な情報処理能力を養い、パソコンを使ってレポート・論文、プレゼンテーション資料などが作成できる実践的能力を養成することを目的とする。</p>	
	ウェブデザイン	<p>ウェブサイトの作成に必要な知識や設計に関する技術だけでなく、インターネット利用者が使いやすいサイトのデザインやインターフェース及びサイトの管理方法について学ぶ。ウェブサイトの企画、構築することを目標に、基本的なウェブサイトの作成やその修正ができる実践的な能力を育成するとともに、ウェブデザインに必要な基礎的理論やWWW(World Wide Web)の仕組みを理解し、ウェブを通して、情報を世界に効果的に発信できる能力を身につけることを目的とする。</p>	
	情報社会と倫理	<p>学士力として求められる情報活用能力の前提となる情報倫理を身につけること、具体的には、①情報社会の光と影、情報化がもたらす功罪両面について理解できるようになること、②情報社会において必要な知識・態度(法規制の内容、情報の発信に伴い遵守すべき事柄、自己責任の範囲、情報セキュリティに関する知識、被害に遭った時の対応等)を身につけ、情報社会で問題に直面した際、自分で考えて対処することができるようになること、を目的とする。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
体育科目		健康・スポーツ科学Ⅰ	生涯にわたってより豊かな生活を送るためには、健康が第一である。そのような背景のもと、健康の維持増進のために身体活動の実践が重要な意味を持つことについて、スポーツ活動を通して 実践的に理解するとともに、その具体的な方法について習得することを目的とする。加えて、そのような実践的理解に基づき、日常生活においても身体活動の実践機会を増やすような態度を養うこと、および、スポーツの実践を通し他者とのコミュニケーション能力を向上させ、チームワークの大切さを習得することを目的とする。		
		健康・スポーツ科学Ⅱ	各種スポーツ種目の実践を通して、文化としてのスポーツの在り方について学ぶことを主たる目的とする。加えて、人間は重力に抗い生活していることを自覚し、望ましい姿勢や無駄のない身体操作法について学び、日常生活における健康的な身体の内り方について学ぶとともに、リフレッシュ法についても実践的に習得するとともに、現代社会における生活習慣病の概況についても理論的に学び、健康の三要素（運動、栄養、休養）の重要性について理解することを目的とする。		
キャリア教育科目		キャリア形成論	高校生活と大学生生活の違いを踏まえながら、将来どんな職業につきたいのか、また、どのような職業につけるのかということを考え、学生生活の目標・行動計画を描くことで、充実した大学生活を送るきっかけを提供する。また、学生生活から職業に移行するために必要な知識を学び、社会にはどのようなキャリアがあるのかについて解説する。「自分を知る」、「進路の可能性を知る」、「社会を知る」ことにより、将来の職業のイメージを形成し、進むべき道の方向性を見出し、卒業後の進路選択について考える基礎を培うことを目的とする。		
		インターンシップ	企業や事業所などにおいて、実際の業務を体験し、大学で学ぶ社会の現状や諸課題と就業現場との関わりや相違などを学びながら、自己の職業適性に対する理解を進め、キャリア形成への支援や就業意識の啓発を図る。また、大学における学びと社会での就業体験を結びつけることにより、新たな学習意欲を喚起させる。現場での実習に加え、実習前の研修、実習報告書の提出、実習後の報告会における発表などを行う。就業体験を通じ、仕事を円滑に行うために必要な基本的知識や能力を理解し、職業観や社会人基礎力を育みながら、就業意識を養うことを目的とする。	集中	
		日本とグローバル人材	企業、事業所、組織などでグローバルに活躍する人材をゲストスピーカーとして招き、社会のグローバル化が日本とどのような関わりを持ちながら、実社会において進展しているかについて理解を深める。グローバル化した社会を身近な現実として認識させることにより、言語の習得をはじめ、将来必要となる幅広い分野に対する学習意欲の向上を図る。また、企業や地方自治体など実際の現場で求められる「グローバル人材」の資質についての認識を深め、自らの行動や将来のキャリアの可能性を考察するための一助とすることを目的とする。		
専門教育部門	外国語科目群	第一外国語科目	英語コミュニケーションⅠ（基礎1）	英語を使う情報交換型のタスク活動を通して、話す、聞くを中心とした英語のコミュニケーション能力を高める。初対面でのやりとり、聞き返しの仕方など、相互行為をもとにした英語使用を徹底し、英語を使うことの抵抗感を取り除いていながら、英語を共通語とする円滑なコミュニケーションの上達を目指す。比較的簡単な英語で意見や気持ちをやり取りしたり、基本的な情報を伝えたり、簡単な意見交換ができるようになることを目的とする。	
			英語コミュニケーションⅡ（基礎2）	英語を使う情報交換型のタスク活動を通して、話す、聞くを中心とした英語のコミュニケーション能力を高める。情報を求める、与える、様々な物や事柄の記述を行う、許可を求めるなど、相互行為をもとにした英語使用を徹底しながら、英語使用能力の上達を図る。英語を共通語とする自由度の高いコミュニケーションを目指す。身近なトピックについて比較的簡単な英語を多様に用いて、社交的な会話を続けることができ、また必要に応じて詳細な情報を提供できるようになることを目的とする。	
			英語コミュニケーションⅢ（応用1）	英語を使う情報交換型タスク活動を継続しつつ問題解決型のタスク活動を主としたタスク活動を導入しながら、話す、聞くを中心とした英語のコミュニケーション能力を高めていく。提案、確実性の表明、依頼、共感的反応の方法などを含めた会話運営のためのスキルを習得する。ある程度なじみのあるテーマなら、新聞やインターネットで見たり読んだりしたニュースに関する会話に参加し、自分の考えを表明できることになることを目的とする。	
			英語コミュニケーションⅣ（応用2）	情報交換型タスク活動や問題解決型のタスク、ナレーション型タスクなど様々なタスクの遂行を実践しながら、話す、聞くを中心とした英語のコミュニケーション能力のさらなる向上を目指す。禁止の表明、情報や意味の確認、疑いの表明、意見の提示などを含めた会話運営のための高度なスキルを習得する。一般的な分野から文化、学術などの専門的な分野まで幅広いテーマの会話に積極的に参加し、自分の考えを正確に表現できるようになることを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語コミュニケーションV (発展)	情報交換型タスク活動も継続しながら、問題解決型のタスク活動を主軸にしたタスク遂行を実践する。話す、聞くを中心にした英語のコミュニケーション能力のさらなる発展を目指す。同意・不同意の仕方、期待の表明、問題の提示、会話への割込みの仕方などを含めた高度な会話マネージメント・スキルを習得する。社会上、仕事上の目的にあったことば使いが効果的にでき、自分の発言を他の話し手の発言にうまくあわせた会話運営ができるようになることを目的とする。	
	英語リーディングⅠ(基礎 1)	高校までに習得した英語力をベースとし、文章校正のタスクなどを取り入れることによって文法知識を確実なものとしながら、読解技術の向上を目指す授業。学生はまとまった文章から事実や明示的なメッセージを取る練習をする。学習や教室活動に関連する語句を始めとして、日常生活に存在するサイン、標識、スケジュール表などに現れる英文を素早く、かつ正確に読めるようにする。さらにまとまったストーリーの読解に向けて、題から内容を推測し、ストーリー構築や解釈に必要な登場人物、場面を正しく認識できる読解能力を習得することが目的である。	
	英語リーディングⅡ(基礎 2)	様々なジャンルの英文を教材として用い、文章校正のタスクなどを通して文法知識を確実なものとしながら、読解力を高める。英文の構成を理解し、音読や、ペアリーディングの活動を通して、メインアイデアを把握できるようにする。未知の単語の意味を辞書を使わずにどのように文脈から推測するのか、また複数の異なった意味を持つ単語の場合には、文脈をヒントにすることによってどのように正しい意味を選択するのかについて学ぶ。読解力の向上を図り、論評においては事実なのか意見なのか判断できるような批判的思考力を涵養することを目的とする。	
	英語リーディングⅢ(応用 1)	小説、評説文、時事文など様々なジャンルの文体の英語を正確に読み取ることができるよう、文章校正のタスクなどを通して文法知識の精緻化を図りつつ多くの英文を読み進める。また様々なジャンルの英語文をより効果的に読み取るために必要な「スキミング」や「スキヤニング」の技能を読みの実践を通して習得する。また英文の情報をまとめたり、英文の明示的、暗示的テキストから自分なりの結論を導き出せるような読解力を涵養することを目的とする。	
	英語リーディングⅣ(応用 2)	時事文、小説、評説文など様々なジャンルの文体に慣れ、テキストを比較対照しながら、登場人物を把握したり、著者の観点を読み取ったりする練習を行う。また文章校正のタスクなどを通して文法知識の高度化を目指す。常用される文体や表現形式を取り上げ、原因-結果、演繹論理などのテキストの論理構造を踏まえて意味を推論しながら批判的読解ができるレベルの高い読解力の向上を図ることを目的とする。	
	英語リーディングⅤ(発展)	複雑な事実に基づく時事及び評説文、公式文書、ビジネス文書など、異なる文体の英語で書かれたかなりまとまった量のテキストや文学テキストに関し、文体の違いを認識しながら正確に、かつ時間をあまりかけずに読み取ることができるよう実習する。ジャンルの特徴的表現に慣れ、表現意図を読み取ることができるようになるために、リーディング・インプットを増やし、辞書を使わずに、必要な情報や論点を読み取る練習を反復する。自分の関連外の分野の専門的記事でもそれほどの困難を伴わず理解できるようになることを目的とする。	
	英語ライティングⅠ(基礎 1)	高校までに習得した英語力をベースとした、文章表現技能の向上を目指す授業。意思決定のタスクを実践して自己に関する話題や日常的话题で英文を書けるようにする。合わせて語彙、句、表現などのリストを作り、文単位のクローズで英文を作成する練習を行う。Eメール、メモ、など実践的な目的の英文書のパターンを学び、日本語の文章表現を英語で表現する技能を向上させるとともに、文化の相違と言語の表現形式の相違について学ばせることを目的とする。	
	英語ライティングⅡ(基礎 2)	「英語ライティングⅠ(基礎1)」より、一段レベルの高い文章表現技能の向上を目指す授業。たとえばEメールでも、量を増やしたテキストを書く練習を行う。テンプレートを利用して英文を書くことで、英文を書くときの典型パターンを学び、出来事や人物や手順などを英語で書き表わすタスクを通して、パラグラフ・ライティングの概念の導入を図る。語彙力や文法知識を増強し、英語文書の約束事を理解しながら、まとまりのある英文を書けるようになることを目的とする。	
	英語ライティングⅢ(応用 1)	複数のパラグラフから構成される英文を書く実践練習をする。パラグラフを論理的にまとまりのある英文として理解し、論理展開を示す接続詞やつなぎの語句や文を用いて一貫性のある英文を作り上げることができるようにする。さらにノート・テイキングについて理解を深め、英語を聞きながら、ノート・テイキングを実践し、その技術を習得する。長めの英文を書き換えたり、要約を書いたりするタスクを通して、正確な英語で文章表現する能力を高めていくことを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語ライティングⅣ(応用2)	自らの主張を正当化するためには、どのような支持文をどの順序で書けば効果的なのかについて学ぶ。書いた文書を見直したり、修正したりする編集タスクを通して詳細にも目配りしながら、一定の正確さを確保した文章を作成し、英語での文章表現能力を高めていく。あるテーマに関して自らの意見や考えを表明し、原因や結果、仮定的な状況の設定など、効果的なレトリックを展開してあらたまったレポート文書を英語で書けるようになることを目的とする。	
	英語ライティングⅤ(発展)	いくつかの視点を示して明瞭な構成で自己表現ができるようになるための文章作成のタスクを行う。上級語彙の増強を図り、結束性や複雑な文構造への理解を深める。自分が重要だと思う点を強調しながら、どんなジャンルで書くべきなのか、公的文書なのか、ビジネス文書なのか、文学作品なのかというような英文の類型化も把握しながら、読者を念頭に置きつつ、適切でかつ格式のある表現によって正確な英文を作成できるようになることを目的とする。	
	英語ディスカッションⅠ(基礎1)	比較的簡単なテーマに関する英文を読み、アイデアをまとめ、ディスカッションを行う。テーマは身近で、日常的な諸問題からはじめ、簡単な社会問題や文化などに関するものへと発展させていく。授業ではリーディングの内容をもとに、様々な活動をとおして、アイデアのまとめ方、そしてその表現方法を学ぶ。その後、5名前後のグループに分かれ、テーマについて1人ひとりが意見を述べる。教員はグループを回って、学生のディスカッションについて、コメントを加える。受信情報の整理から情報発信につなげ、学生の積極的な意見表明を習慣化させることが目的である。	
	英語ディスカッションⅡ(基礎2)	比較的簡単なテーマに関する英文を読み、アイデアをまとめ、ディスカッションを行う。テーマは主に簡単な社会問題や文化などに関するものを扱うが、議論の対立が起こりやすいものを選ぶ工夫をする。授業では、英語ディスカッションⅠ(基礎1)と同様の活動に加え、ディスカッションではテーマに対し特定の立場(反対・賛成など)を各自がとり、その立場を支持するための主張を根拠・理由に基づいて行う。自分の主張に根拠や理由をつけることを意識させ、より説得力のある発言を促すことを目的とする。	
	英語ディスカッションⅢ(応用1)	比較的簡単な社会問題や文化などに関するテーマを設定し、学生はそのテーマに関し必要に応じてリサーチを行い、資料とアイデアをまとめ、自らの議論を組み立てたうえでディスカッションを行う。リサーチ方法と集めた資料の整理の仕方の基本的な理解をし、様々な活動を通して、集めた資料を自分の発言に織り交ぜていく方法を学ぶ。与えられたテーマに関し、自ら資料を調べ、それらを使い説得力のある議論をする基礎を学ぶことを目的とする。	
	英語ディスカッションⅣ(応用2)	社会問題や文化などに関するテーマを設定し、学生はそのテーマに関する英文を読むことに加え、リサーチを進めながら、アイデアをまとめ、ディスカッションを行う。授業では扱うテーマ1つに対し、比較的長く時間を使い、段階的に論点が増やせるように工夫することでディスカッションの内容を充実させることを目指す。情報収集を行うことにより、話し合いの内容が深まってゆく過程を意識させ、情報発信のための情報収集を習慣化し、発言の質的、量的向上を促すことを目的とする。	
	パブリック・スピーキング	異なる目的のための口頭発表やスピーチに必要な理論的枠組みと、その実践に求められる基礎知識をスピーチ・コミュニケーション学の見地から解説する。特に、聴衆を想定しながら内容を推敲し、構成、伝え方を状況や目的に応じて臨機応変に対応するための基礎を学ぶ。また、パブリック・スピーキングを学ぶことは、話し手と同時に聴き手としての責任を理解し実践することを意味する。聴衆側の立場でも批判的に内容を精査出来るようになることで、話し手・聴き手双方の役割の基礎理解を深めることを目的とする。	
	ディベート	価値観が多様化し社会的背景が複雑になる中で、論理的な思考能力、異なる考えに対する批判的(否定的ではない)姿勢、そして議論を効果的に伝える技術を養うことが重要である。ディベートの基礎知識を学び、ディベートとは、揚げ足取りや言葉の暴力ではなく、ルールに基づく議論のぶつけ合いを通して物事を大局的に捉える活動であることを解説する。論題に対して、時に個人的意見を脇に置き、肯定・否定の両側面を考察し、即興的なものから資料調査に基づく議論構築まで包括的に行える資質を培うことを目的とする。	
第二外国語科目	中国語入門Ⅰ	中国語を始めて学ぶ人を対象にした授業である。日本語にない音の出し方や、日本語の漢字とは異なる字形に慣れることを目的とする。35の母音と21の子音の発音、4つのトーン(声調)を繰り返し練習し、漢字の発音の仕方を記した「ピンイン表記」を見ながら正確に発音する力を養う。漢詩の暗誦、書き取りを含むヒアリングなどを通じて、「話す」こと・「聴く」ことを重視した練習を行ない、中国語の音に慣れてもらう。また、基本的な文法事項の習得とともに、簡単な自己紹介のできる表現力を身につけることを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中国語入門Ⅱ	中国語を始めて学ぶ人を対象にした授業である。日本語にない音、4つのトーン（声調）、日本語の漢字とは異なる字形に慣れることを目的とする。母音、子音、4つのトーンを繰り返し発音練習することのほか、漢字の発音を記したローマ字表記（ピンイン表記）を見て発音できることを第一の目標とする。同時に、基礎的文法事項についても学習する。作文や書き取りによる「書く」練習のほか、ロールプレイやスキット暗誦を通じた「読む」練習など、身体をフル活用して、中国語の基礎的事項を身につけることを目的とする。	
	中国語初級Ⅰ	中国語の発音篇を一通り学んだ人を対象にした授業である。音から単語、さらに短文へと、「意味をなす音のまとまり」のレベルを段階的に上げながら、中国語の「聴く力」を養うことを目的とする。発音された内容を、簡体字あるいはピンインで書き取る練習を繰り返し行う。教科書にでてくる単語や例文を、簡体字表記からピンイン表記に、また逆にピンイン表記から簡体字表記に直す練習のほか、簡単な会話文を繰り返し聴き、簡体字に直す練習も行う。主として「聴く」力と「話す」力の相互的強化を目的とする。	
	中国語初級Ⅱ	中国語の発音篇を一通り学んだ人を対象にした授業である。第一に、ピンインを見ながら短文を発音する力を養うことを目的とする。中国語の400の音を記した一覧表（音節表）を用いて、これまで学習した中国語の音と四つの音のトーンの定着をはかる。第二に、基礎的文法事項の習得を目的とする。入れ替え練習、並べ替え練習、作文などを通じて、中国語の基本的な文型や構文を習得してゆく。また、視聴覚教材を活用して、生の中国語に接する機会を設けるとともに、中国社会や文化についての基礎知識を学ぶことを目的とする。	
	中国語中級Ⅰ	中国語の基礎的事項を学んだ人を対象にした授業である。簡単な会話文や、短い中国語ニュースの聞き取りにより、「聴く」力を養うことを目的とする。また、簡単な会話文や定型化された挨拶表現についても習得してゆく。課題文のシャドウイングやクイックレスポンスなどを通じて発音練習を重ね、本文全体を暗誦してもらう。次に、それを日本語から中国語へ、中国語から日本語へ即時に口頭で訳す練習を行う。最後に、プレゼンテーション大会も行う。日常生活をする上で最低限必要な「話す」力を身につけることを目的とする。	
	中国語中級Ⅱ	中国語の基礎的事項を学んだ人を対象にした授業である。日常生活に必要な語彙・表現を増やし、構文や呼応表現に留意しながら中国語の文を「読む」力を養うことを目的とする。同時に、中国文化や現代中国が抱える諸問題に関する知識の獲得を目指す。課題文については、発音や意味内容を事前に確認してもらおう。授業では、課題文の発音練習とその矯正、内容の把握と具体的解説、また設問に中国語で答える練習などを行なう。最終的に、日常生活で目にするレベルの、1000字程度の中国語の文を、制限時間内に「読む」ことを目的とする。	
	中国語応用Ⅰ	第一に、より実践的な中国語の「聴く」力を養うことを目的とする。中国語会話やニュースなどを用いて、聴き取った中国語を、その場で適当な日本語に訳す練習を行う。第二に、「自己表現の力」の獲得を目指す。これまでに学んだ様々な表現を踏まえて、五分程度のスピーチ文を作成し、人前で発表する練習を行う。さらに発表内容に対する質問を想定して、答え方のバリエーションを事前に準備するなどの練習も行う。プレゼンテーションを意識した「自己発信型の会話力」の養成を最終的な目的とする。	
	中国語応用Ⅱ	中級レベルの表現を用いて書かれた文章を通じて、呼応表現や成語・熟語などの中国語に独特な表現に慣れるところから始め、より高度な文章を「読む」力を養うことを目的とする。同時に、教材を通じて、中国文化を理解し、現代中国が抱える諸問題に関する知識を習得してゆく。また、ショートショートやエッセイ等といった文学作品を読むことにより、中国人の精神世界を味わったり、台湾や香港で書かれた繁体字表記による文章にも触れ、中国語文化圏の多様性を学ぶことを目的とする。	
	韓国語入門Ⅰ	「韓国語入門Ⅰ」は、韓国語の初学者を対象とした入門の授業であり、「韓国語入門Ⅱ」と連携して韓国語の4つの技能のうち、「聞く・話す」を中心に学習する。まず、韓国語の発音を習得するため、韓国語の調音法に従って発音練習を徹底的に行い、音の発音と聞き取りができるように集中的に訓練する。また、教科書を用い、基本的な韓国語会話の練習を実行する。このような会話練習を通じて、韓国語の基礎レベルのコミュニケーション能力を養うことを目的とする。なお、準備学習として、「韓国語レッスン」というウェブサイトを利用する。	
	韓国語入門Ⅱ	「韓国語入門Ⅰ」と連携し、教材の対話文を中心に丁寧語の格式体の会話パターンを身につける。同時に、習得した単語を用いた会話練習を通じて、決まったテーマの状況に相応しい韓国語文法項目の習得ができることを目指す。文法項目として時制、数字、そして要請や指示などの終結語尾を習得する。また、授業中の読みの練習を通じて発音や会話表現の矯正を行う。このような言語項目を利用し、関連テーマの短文や会話文の作文及び読解ができるようにすることを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	韓国語初級Ⅰ	「韓国語初級Ⅱ」と連携し、入門課程で身につけた韓国語能力をより発展させ、口頭表現力をより流暢に高めることと同時に、聴解力の発展を目指す。到達目標は、日常会話で最低限必要な意思を伝えるようになることである。具体的なシチュエーションを含む対話文を教材として用い、学生と教員・学生同士の日常的やりとりによって口頭表現力をつけながら、ナチュラルスピードより少し遅いくらいの会話に自然に慣れていくようにする。韓国語の会話技能の基礎を習得することを目的とする。	
	韓国語初級Ⅱ	「韓国語初級Ⅰ」と連携し、韓国語の文法項目を学習し、作文と読解の基礎を深める。到達目標は、日常的な会話文や短い説明文の作文・読解を可能とすることである。多様な形容詞及び非格式体の終結語尾及び条件・仮定や理由・原因の連結語尾を学習し、自分の感覚・感情などの表現ができるようにする。さらに読解練習と日常生活に関する作文を通じて、文語表現になじむようにする。このような文法項目の学習と読解や作文の課題を行うことにより、韓国語の表現力を高めると同時に短い文章の読解力を向上させることを目的とする。	
	韓国語中級Ⅰ	「韓国語中級Ⅰ」では、韓国語初級で滋養した会話や聴解能力の範囲を広げ、公的な状況での問題解決能力を習得することを到達目標として学ぶ。会話に自然さを加える口語体の連結語尾を身につけ、より自然な会話構成ができるようにする。また、長めの対話や3分程度のナレーションの聴解ができるようにする。更に、モダリティー表現を学習し、韓国語のニュアンスの差を表すことや理解することもできるようにする。このように、私的・公的な状況でより高度の会話表現を可能とすると同時に、聴解能力を高めることを目的とする。	
	韓国語中級Ⅱ	「韓国語中級Ⅰ」と連携し、韓国語のより複雑な文章を読むことを学ぶ。簡単な文学作品の鑑賞も可能な程度の読解力と自分の意見や話を自分の表現により、作文できるようになれることが到達目標である。特に、丁寧な表現以外にも格式体と非格式体の非丁寧語を修得し、4種類の韓国語の敬語法を作文に自由に用いることができるようにする。また、韓国文化から由来した用語や熟語、慣用句などを身につけ、韓国語的表現法になじむようにする。このような慣用句を用いた文章の理解や表現が可能となるようにすることを目的とする。	
	韓国語応用Ⅰ	「韓国語応用Ⅰ」は、聴解や読解の理解力と発表や作文の表現力を総合的に高めるための練習を組み合わせ、高度のコミュニケーション能力の向上を到達目標として学ぶ。ニュースの聴解、新聞社説や教養書籍の読解などの課題を用い、聴解練習と連携した関連テーマの作文や、読解練習と連携した関連テーマに関する討論または発表を行い、言語技能の統合的な発展ができるように構成した授業である。このように、韓国語文献からの情報の取得・総合・分類が可能となり、韓国語で構想をたて作文し、発表できるようにすることを目的とする。	
	韓国語応用Ⅱ	「韓国語応用Ⅱ」は、課題中心の授業で、現代日本の主な時事問題や日本の伝統文化、ポップカルチャー等を韓国語で正確に解説できるようにすることを到達目標とする。小規模のグループワークで自ら決めたテーマに関する情報を集め、それを基に簡略な韓国語のプレゼンテーションを準備し、発表及び報告書作成を行う。このような課題解決の練習を通じて、韓国語文献からの情報の受容のみならず、自ら日本に関する情報の発信ができるように、韓国語の作文能力の向上を目的とする。	
	フランス語入門Ⅰ	「フランス語入門Ⅰ」は、フランス語の初学者を対象とした授業であり、話す、聞くという会話の技能を中心に学ぶ。とりわけ、フランス語の発音を徹底して学習する。日本語の音韻体系と比較しながら、フランス語の発音の特徴を抽出し、日本語話者にとって習得の難しい音声をピックアップし集中的に訓練する。さらに日常会話の基本となる文型を教師と学生、学生相互の間で繰り返し練習する。フランス語の会話の基礎を一通り学ぶことが目的である。	
	フランス語入門Ⅱ	「フランス語入門Ⅱ」は、フランス語の初学者を対象とした授業であり、文章を読むという技能と文法を中心に学ぶ。まず綴り字と発音の関係について十分に習得し、一人で簡単な文を音読することを身につけさせる。また辞書の引き方を学びながら基本的な単語は最低限覚えさせ、代入練習により構文の練習を行う。文法面では冠詞と名詞、形容詞の組み合わせと簡単な動詞を学んで文の構造の基礎を押さえる。フランス語の読みと文法の基礎を固めていくことを目的とする。	
	フランス語初級Ⅰ	「フランス語入門Ⅰ」に続いて、フランス語を話す、聞くという技能を中心に学習する。到達目標は日常会話で最低限必要な意思を伝えるようになることである。具体的なシチュエーションを含む少し進んだ対話文を教材として用い、教員と学生、学生同士の日常会話的やりとりによって口頭での表現力をつけながら、ナチュラルスピードより少し遅いくらいの会話に自然に慣れていくようにする。フランス語の会話技能の基礎を習得することを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	フランス語初級Ⅱ	「フランス語入門Ⅱ」に続いて、フランス語の読みと文法の基礎を深め、さらに書く事の初歩を学習する。到達目標は一人で辞書を引いて簡単な文章を読むことが可能になることである。代名詞の使い方、動詞のいろいろな時制、前置詞を含む慣用句などの辞書での調べ方に慣れることで比較的まとまった文が読めるようにする。さらに比較級、最上級、関係代名詞など文法項目としてまとめて学ばなければならないものを練習問題を繰り返しながら身につけていく。並行して簡単なフランス語を書くという事にも少しずつ慣れていく。フランス語の読み、書き、文法の基礎を一通り概観することを目的とする。	
	フランス語中級Ⅰ	「フランス語初級Ⅰ」に続いて、簡単な紹介、案内、スピーチなどが、フランス語らしい表現を用い、フランス語らしい発音でできるようになることを到達目標として学ぶ。単に観光や友達作りにとどまらず、外国人に自分の置かれている立場や希望などを説明するなど様々な場面や状況にふさわしい表現形式や対話の展開について教員と学生、学生同士のやりとりを通して練習する。フランス語のスピーキング力を向上させることが目的である。	
	フランス語中級Ⅱ	「フランス語初級Ⅱ」に続いて、フランス語のより複雑な文章を読むことを学ぶ。やや難しいフランス語が読めるようになることが到達目標である。関係詞節や副詞節などを使った複雑な文章の繋がり方を読み解いていくにはどのようにしたらよいかを、ビジネス的な実用文から文学的な小文まで実際のいろいろな文章を読んでいくことによって習得していく。きちんとした日本語にしていくことでフランス語の理解が深まると同時に、日本語の使い方も磨けるようになる。フランス語を読む力を向上させることが目的である。	
	フランス語応用Ⅰ	「フランス語中級Ⅰ」に続いて、フランス語の会話技能を深める。準備したものをもとにして一定の長さの話ができるようになることが到達目標である。10分間程度を目安とする一定量のスピーチ、プレゼンテーションなどができるように、まずスピーチの題材となる言うべき内容を考え、そのスピーチの目的に応じて、それにふさわしい語彙や表現形式をまず辞書やインターネットの検索で見つけそれらを用いてスピーチやプレゼンテーションなどができるように学習する。目的や場面にふさわしい表現形式やスタイルでスピーチやプレゼンテーションのできるスピーキング力を培うことが目的である。	
	フランス語応用Ⅱ	「フランス語中級Ⅱ」に続いて、読む、書くという技能を深める。テーマを決めて自由作文をるところまで行くことを到達目標とする。短い文を読んでこれを反対の意味にしたり、要件を少し変えるなど変形していくことから始め、次第に様々な分野の少し長めの文を読んでフランス語で要約したり、その文を元に自分の意見を文章で述べたりする訓練をする。フランス語の読み、書きの技能を一通り使いこなせるようになることを目的とする。	
	スペイン語入門Ⅰ	「スペイン語入門Ⅰ」は、スペイン語の初学者を対象とした授業であり、話す、聞くという会話の技能を中心に学ぶ。とりわけ、スペイン語の発音を徹底して学習する。日本語の音韻体系と比較しながら、スペイン語の発音の特徴を抽出し、日本語話者にとって習得の難しい音声をピックアップし集中的に訓練する。さらに日常会話の基本となる文型を教師と学生、学生相互の間で繰り返し練習する。スペイン語の会話の基礎を一通り学ぶことが目的である。	
	スペイン語入門Ⅱ	「スペイン語入門Ⅱ」は、スペイン語の初学者を対象とした授業であり、文章を読むという技能と文法を中心に学ぶ。まず綴り字と発音の関係について十分に習得し、一人で簡単な文を音読することを身につけさせる。また辞書の引き方を学びながら基本的な単語は最低限覚えさせ、代入練習により構文の練習を行う。文法面では冠詞と名詞、形容詞の組み合わせと簡単な動詞を学んで文の構造の基礎を押さえる。スペイン語の読みと文法の基礎を固めていくことを目的とする。	
	スペイン語初級Ⅰ	「スペイン語入門Ⅰ」に続いて、スペイン語を話す、聞くという技能を中心に学習する。到達目標は日常会話で最低限必要な意志を伝えるようになることである。具体的なシチュエーションを含む少し進んだ対話文を教材として用い、教員と学生、学生同士の日常会話的やりとりによって口頭での表現力をつけながら、ナチュラルスピードより少し遅いくらいの会話に自然に慣れていくようにする。スペイン語の会話技能の基礎を習得することを目的とする。	
	スペイン語初級Ⅱ	「スペイン語入門Ⅱ」に続いて、スペイン語の読みと文法の基礎を深め、さらに書く事の初歩を学習する。到達目標は一人で辞書を引いて簡単な文章を読むことが可能になることである。代名詞の使い方、動詞のいろいろな時制、前置詞を含む慣用句などの辞書での調べ方に慣れることで比較的まとまった文が読めるようにする。さらに比較級、最上級、関係代名詞など文法項目としてまとめて学ばなければならないものを練習問題を繰り返しながら身につけていく。並行して簡単なスペイン語を書くという事にも少しずつ慣れていく。スペイン語の読み、書き、文法の基礎を一通り概観することを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	スペイン語中級Ⅰ	「スペイン語初級Ⅰ」に続いて、簡単な紹介、案内、スピーチなどが、スペイン語らしい表現を用い、スペイン語らしい発音でできるようになることを到達目標として学ぶ。単に観光や友達作りにとどまらず、外国人に自分の置かれている立場や希望などを説明するなど様々な場面や状況にふさわしい表現形式や対話の展開について教員と学生、学生同士のやりとりを通して練習する。スペイン語のスピーキング力を向上させることが目的である。	
	スペイン語中級Ⅱ	「スペイン語初級Ⅱ」に続いて、スペイン語のより複雑な文章を読むことを学ぶ。やや難しいスペイン語が読めるようになることが到達目標である。関係詞節や副詞節などを使った複雑な文章の繋がり方を読み解いていくにはどのようにしたらよいのかを、ビジネス的な実用文から文学的な小文まで実際のいろいろな文章を読んでいくことによって習得していく。きちんとした日本語にしていくことでスペイン語の理解が深まると同時に、日本語の使い方も磨けるようになる。スペイン語を読む力を向上させることが目的である。	
	スペイン語応用Ⅰ	「スペイン語中級Ⅰ」に続いて、スペイン語の会話技能を深める。準備したのものをもとにして一定の長さの話ができるようになることが到達目標である。10分間程度を目安とする一定量のスピーチ、プレゼンテーションなどができるように、まずスピーチの題材となる言うべき内容を考え、そのスピーチの目的に応じて、それにふさわしい語彙や表現形式をまず辞書やインターネットの検索で見つけそれらを用いてスピーチやプレゼンテーションなどができるように学習する。目的や場面にふさわしい表現形式やスタイルでスピーチやプレゼンテーションのできるスピーキング力を培うことが目的である。	
	スペイン語応用Ⅱ	「スペイン語中級Ⅱ」に続いて、読む、書くという技能を深める。テーマを決めて自由作文をるところまで行くことを到達目標とする。短い文を読んでこれを反対の意味にしたり、要件を少し変えるなど変形していくことから始め、次第に様々な分野の少し長めの文を読んでスペイン語で要約したり、その文を元に自分の意見を文章で述べたりする訓練をする。スペイン語の読み、書きの技能を一通り使いこなせるようになることを目的とする。	
専門基礎科目群	英語学概論	英語学とは言語としての英語の有り様を分析し、説明しようとする言語学の下位分野である。言語学の基本的概念である音素、形態素、句構造、統語規則、意味について英語を対象言語とし、英語の例を観察しながら理解を深める。英語に関してその音韻的特徴、語形成のパターン、文の基本的構造、意味解釈の問題を学ぶことにより、英語という言語を大局的に俯瞰できるようにする。英語のデータを自ら分析する実践を通して英語学の諸知識を修得し、英語の形態論、統語論、意味論上の諸問題について把握し理解を深めることを目的とする。	
	英米文学概論	<p>英語圏の文学の中で特に英米文学を学ぶ意義とは、イギリス文学に凝縮されている「英語という言語がもつ伝統性」、またそうした伝統への反発から新たな言語文化を發展させてきたアメリカ文学に顕著な「英語の変容性と可変性」に同時に触れるためである。そこで、英米文学の代表的文学作品を概説するとともに、上記の特性を醸成した歴史的文化的背景について解説する。英米文学を支えている代表作やその特徴を理解し、それらの知識を自国の文化、文学との類似や差異と関連付けながら自由に発信できるようになることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (11 柳沢 秀郎/8回) アメリカという国の成り立ち、およびその後の国家形成が小説や詩に代表される言語芸術にどのように反映されているのかについて通史的に学ぶことでアメリカ文学の全体像を把握するとともに、そこで得た知見を現代アメリカの諸問題と関連付けることで、今日のアメリカ理解にも応用できる素地を養う。 (33 西山 徹/7回) 英米文化の礎となるイギリス文学の潮流を概観する。イギリス文学における主要な作家や作品を取り上げ解説するとともに、イギリス文化への影響や文学が生まれた時代背景を学ぶ。イギリス文学を理解するための基礎的知識の修得を目指す。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	異文化理解	<p>異文化との接触において生じる文化摩擦を克服するためには、言語運用能力を高めると同時に、言語の背後にある文化的価値観まで理解を深めることが不可欠となる。異文化理解では「文化」という概念について学び、それが人間の行動や考え方の根幹にあること、表層的で可視的な事象から掘り下げてその事象の基となっている考え方や価値観を探る可能性を理解する。更にその過程を通じて、自己の文化や自己と異なる文化背景を持った他者とどのように理解し合えるかについて考察を深めることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (5 二神 真美 /8回) 地理的環境や歴史的発展に規定される生活様式や社会習慣や伝統文化について理解を深め、異文化に対する受容能力を育てると同時に、自文化を相対的にとらえる洞察力を養う。 (3 村田 泰美 /7回) 日本語と英語の語彙や文法構造がどのようにそれぞれの文化を表しているかを解説するとともに、文化的価値観の変化が言語形式や言語使用に与える影響を学んでいく。</p>	オムニバス方式
選択必修科目枠①	英語音声学	<p>英語と日本語の音声について調音位置、調音方法を学び、母音および子音の分類の仕方を理解する。また、英語自然発話の特徴であるストレス・リズム・イントネーション等の仕組みを学ぶ。それらを言語の音を記述するために定められた国際音声記号 (IPA) を使って音声特徴を記述できるようになる。さらに、音響分析手法を学び、音声を視覚的に捉える。これらのスキルにより、両言語の音声の差異を自ら発見することによって、日本語話者にとり、発音が難しく、コミュニケーションに支障を与えると予測される英語音声特徴を抽出し、英語音声の知覚と産出ができるようになることを目的とする。</p>	
	英語の構造と仕組み	<p>英語の言語構造について語の最小単位である形態素を理解するところから始める。次に品詞、句、節や文という単位でどのように英語の構造を記述できるかを考えることで、英語に対する感覚を養う。さらに構造文法や生成的な分析方法を使いながら形態統語規則に対する理解を深める。その上で文形式より大きな談話単位の中での指示詞、時制、態の使われ方に注目し、文章が文文法を超えた規則によってどのように支配されているかを分析できるようになることを目的とする。</p>	
	コミュニケーションのための英文法	<p>ことばは単に情報を伝達するだけでなく、人間関係の確認のためにも使われる。情報よりも対人関係の構築や維持のために言語が使用されるのを phatic communion(言語交際) とよぶ。英語でコミュニケーションを図る時、どのような言い回しや、表現が言語交際機能となるのかを考え、基底に潜む価値観まで考察を進める。次の段階としてさまざまな発話行為を取り上げ、英語と日本語でどのような違いがみられるのかを観察し、英語コミュニケーションの特徴を理解することを目的とする。</p>	
	イギリス文学研究	<p>イギリスは言うまでもなく英語の母国であり、イギリスの文学は英語の形成にも言葉の背後に潜む文化や価値観にも大きく影響してきた。イギリスの文化や価値観を理解するために、イギリスの代表的な作家やその作品を取り上げ、イギリス文学の特質や作品を読み解く方法について解説するとともに、それぞれの作品が生まれた時代背景を踏まえながら作品の背後にある社会的事情との関わりについても解説を加えていく。時代の思潮を踏まえながら、イギリス文学の作品を正確に読み解く方法の修得と文学を通しイギリスの文化やイギリスに暮らす人々のものの見方を理解することが目的である。</p>	
	アメリカ文学研究	<p>今日、アメリカ文学研究の世界的動向は、もはや当事国アメリカ内部の議論だけに留まらず、トランス・ナショナルな視点を取り入れる段階にある。本授業では、ニュー・クリティシズムや印象批評など伝統的旧来の研究手法はもとより、トランス・ナショナルな視点で議論されるアフロ・アメリカンやアジア系など人種マイノリティ文学やポスト・コロニアル文学などについても解説する。 アメリカ文学研究の最新の動向と手法を理解し、それらを踏まえ、アメリカの言語文化に対してオリジナリティのある解釈を提供できるようになるのが目的である。</p>	
	インタラクティブ・イングリッシュ I	<p>面識のない人にどのように話しかけて友達になるか、社交場面での会話をうまく切り上げるにはどう言うのか、会話の誘い水として「ほめる」、わからない時はどういう問いかけをするかなど、英語で会話を弾ませるようなストラテジーを学び、習得を図る授業である。会話の基本である相手との相互やり取り (インタラクション) のための発信一応答の典型的なパターンを学び、ロールプレーを通して身につけるようにする。英語の相互やり取りの型を覚えることで、自らの母語を振り返り、英語コミュニケーション・スキルの向上と理解を深めることを目的とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目枠②	インタラクティブ・イングリッシュⅡ	双方向のコミュニケーションの場面で、英語における対人関係への配慮ができるような英語文化的価値観を学び、国際英語のマナーをわきまえた英語の表現とは何かを理解した上で、実際のコミュニケーションにおいて場面に応じた定型表現が使えるように練習する。「インタラクティブ・イングリッシュⅠ」から継続して、相手に共感する表現、話の順番を振る方法、苦情を伝える方法、口調を和らげる方法などの会話ストラテジーを習得し、対人関係に配慮した英語運用ができるようになることを目的とする。	
	異文化コミュニケーション	国を単位とした異なる文化間でのコミュニケーションに限定することなく、様々な人間関係レベルと文脈に照らし合わせながら異文化という概念を考察する。自己と他者の関係性は多様化し、人やモノ、文化の行き来は物理的にも、メディアなどを介した新しい形でも日々起こっている。国際的な視野が個人に求められる中で、英語教育に代表される外国語教育などで高まるグローバル化から、日常生活の中に存在する当たり前であると前提にされることまで、様々な異文化に対する「気づき」の基盤作りを目的とする。	
	多文化共生論	国境を越えて人が行き来するグローバル化社会において、各国では社会の多文化化が進んでいる。多文化社会に起こっている現象や異なる文化を背景に持つ人々との共生についてアメリカ社会を中心に解説をする。アメリカ社会が内包する共生と対立の構造について、エスニックグループの居住空間分析から理解したうえで、異文化と共生することが、人類の安寧と豊かな発展の礎であることを認識する。多文化共生の意義に対して理解を深めることにより、グローバル化社会に対応するための資質を培うことを目的とする。	
	日本中世近世史	日本の中世から近世を概観し、歴史的な特質を考える。日本の中世・近世社会の基礎的構造を理解しながら、鎌倉時代から江戸時代に渡る中世・近世において日本の社会や文化がいかに関係形成されてきたかを学ぶ。それらの時代に起こった出来事を取り上げ、解説を加えるとともに、単に史実を学ぶだけでなく、どうしてそのようなことが起こったかを考えながら学習を深める。日本の中世・近世についての基本的知識を学び、歴史を多角的視点から考察することを目的とする。	
	日本文学研究	文学を成り立たせるのは、まず言葉であり、文字であり、次にこれを媒体（紙）に定着させる技術である。独自の音数律を持ち、漢字・仮名という特殊な文字を得た日本文学は、当然西洋文学とは異なる発展を遂げた。本授業では、こうした日本文学の特殊性について学ぶ。具体的には、くずし字と英訳という、互いに最も離れたイメージから作品にアプローチし、さらに翻訳や文体の問題にも言及することで、日本文学を世界の文学の中に相対的に位置づける視野を培うことが目的である。	
	日本の伝統文化	日本文化の最大の特徴は、各時代の文化が淘汰されずに現代も生き続けているという、「文化の重層性」にある。特に能・狂言・歌舞伎・人形浄瑠璃（文楽）といった伝統芸能の分野でこの傾向が強い。西洋の文化人からわが国が”Treasure Island”と呼ばれる所以である。各時代の伝統芸能の成立と展開、その特徴について深く理解し、かつテキストを読みこなす力を涵養する。併せて、自国の文化を英語で紹介することのできる「真の国際人」の養成を目的とする。	
	日本の先端文化	「クール・ジャパン」として世界から注目を集めるアニメ、マンガやサブカルチャー等の日本の先端文化を考察し、そこにみられる日本的な特質について解説する。輸出文化として位置づけられるようになった日本の先端文化と世界との関わり、先行文化としての文学や絵画などとの関連、日本人の行動様式、生活様式、精神構造等との関わりについて解説していく。日本の先端文化の特質について理解を深めるとともに、世界に向けて、日本の先端文化を説明できるようになることを目的とする。	
	アジアを学ぶ	日本を含む多くの先進国は、購買力の低さや、貧困、インフラストラクチャーの弱さなどの側面からアジア諸国をみており、欧米の先進国と比べて魅力の低い地域だと評価していた過去があったことは事実であろう。しかし、最近、このアジア地域の目覚ましい経済発展がきっかけで、世界から注目を浴びようになっている。当授業では、民族、宗教、言語などに加え、経済・社会開発の側面から見て、アジアの魅力とは何かを理解することを目的とする。	
	地域研究論	グローバル化と総称される地球規模での社会・文化的交流がさらに活発化するなか、自他の所属する地域を適切に理解することは、21世紀を生きる者にとって必須である。地域とは自然環境のみならず、歴史や政治、またそこに生きる人びとによって多様に規定されるものであり、多角的な視点からその地域固有の論理を抽出する視野の涵養が求められる。そこで、現代世界における地域論を広く解説したうえで、東南アジアの事例を通じて、環境や宗教、経済など幅広い観点から地域を捉え、自らの地域を相対化する視点を養うことを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門基幹科目群	アカデミック・イングリッシュⅠ	英語圏の留学先における勉学が円滑に遂行し、留学の成果を挙げていくために必要な事項について、英語で情報を提供したり、知識を与えておくことを目的とした授業である。「アカデミック・イングリッシュⅠ」では、人文系分野の講義を英語で聞き取る練習を重ねて専門性のある語彙を増やし、改まった場での定型表現を覚え慣れることによって、ある程度高度な内容の英語でも聞き取れるようなリスニング能力を涵養する。並行して行う講義内のミニプレゼンテーションの実施を通して発言力の向上を目的とする。	
	アカデミック・イングリッシュⅡ	「アカデミック・イングリッシュⅡ」では人文や社会科学の分野に関連する多くの英文を読み、専門的英文のスタイルに慣れることによって、専門的英文でも一定の速度で読みこなすレベルの読解力の涵養を目的とする。もう一つの目的は英語でのレポート (essay writing) を英語の学術文のルールに従ったスタイルで書けるようになる「書く」能力の涵養である。英語圏に留学し正規科目を受講する場合にも対処できる高度な英語力の習得を目的とする。	
	メディア・イングリッシュⅠ	英語でのニュースを聞き取り、理解できるようにするための授業である。ニュースの聞き取りの要となる大きな数字の聞き取りをはじめとして、政治、経済、国際関係、娯楽などジャンル別の基本用語を学ぶ。最新のニュースを見ながら、現在の世界や日本で何が話題となっているのかを把握する。特に経済用語、政治用語を重点的に習得し、自然なスピードで流されるニュースや解説を日本語の介在なしに理解できるようになることを目的とする。	
	メディア・イングリッシュⅡ	インターネットや、新聞など文字で表現された時事英語を読む授業である。画面上のスペースや紙面という制限があるため、文字で表現される時事英語には、特に見出しやリードの部分に独特の文法や省略方法が現れる。それらの特徴を学び、メディア英語の文章構成に慣れることで素早く内容を把握できるようにする。さらに時事英語の正確な理解のために必要不可欠な政治経済用語の習得を図る。辞書の助けがなくても新聞や電子メディアでの時事ニュースを理解できるようになることを目的とする。	
	英語の広がり と多様性	かつての植民地が戦後独立を果たしたこと、現在まで英米が世界の政治、経済、文化の中心になってきたことで、英語は世界で最も汎用される言語となった。今や英語母語話者の人口より英語を第2言語として使用する人口のほうがはるかに多い状況となっている。その広がりの中で世界の各地域では、独特の英語種が生まれ、英語でもお互いのコミュニケーションが容易でない状況が存在する。現代の英語の多様性を認識し、世界に存在する英語変種を聞くことでその違いや英語としての共通性を理解することを目的とする。	
	第二言語習得論	第二言語習得論は母語の次に言語を習得する過程を科学的に探究する学問であり、心理学、脳科学、社会学、言語学など多岐に渡る。本講義では、第二言語習得研究の入門書により、英語学習の理論面を解説する。そしてその得た知識を基に、自身の学習方法の再考を促す。実際の授業では、第二言語習得研究の基礎的な概念や理論の解説をふまえ、学習者コーパスの誤り分析を通じて、その探究方法の基礎的な理解を持つ。それらを通して、科学的に学習段階を分析する術を学ぶとともに、効果的な英語学習の方法への理解を深めることを目的とする。	
	英語科教育法Ⅰ	グローバル化が進行する中、国際共通語としての英語 (English as a lingua franca) の重要性は高まりつつある。本講義では、上記のような社会的視座をふまえて言語や言語教育を考察する応用言語学の視点により、現代に至るまでの英語教授法とその歴史的、理論的背景の解説を行う。とりわけ日本の英語科教育に影響を与えた Oral Approach、Natural Approach、CLT (Communicative Language Teaching)、TBLT (Task-based Language Teaching) などに焦点を当てる。それらを通して、英語教授法における理論と実践の基本的な理解を深めることを目的とする。	
	英語科教育法Ⅱ	「英語科教育法Ⅰ」で得られた英語教授法における基本的な理解を踏まえ、本授業では日本の英語教育現場により焦点を当て、日本人学習者に適した指導法および学習法を検討する。具体的には1) 実際に使用されている中高の英語教科書などをコーパス化して、そのインプットの性質を分析する教材論、2) 知識重視から技能重視への転換を進めるCEFR-Jを中心とした評価論、3) 言語の機能に焦点を当てたCLT、TBLTなどの語用論的な英語教授法の方法論を取り扱う。それらを通して、日本の英語科教育法において適した実践の構想力を高めることを目的とする。	
選択必修科目群	アメリカ地域研究	アメリカ合衆国の歴史、文化、政治、経済、社会、宗教、人々の暮らしやものの見方等の特質に焦点を当て、解説していくとともに、多様性の中の統一を標榜するアメリカ社会の変化と課題についても考察する。さらに超大国として、文化、経済、政治、社会をはじめとする様々な場面で、日本や世界に影響を与え続けているアメリカ合衆国の国際社会での位置づけについても解説を加えていく。 アメリカ合衆国に対する基本的な理解を深めるとともに、多角的視点から国際社会を理解できる能力を涵養することが目的である。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	イギリス地域研究	イギリスの歴史、文化、政治、経済、社会、宗教、人々の暮らしやものの見方等の特質に焦点を当て、解説していくとともに、事実上の国際共通語である英語の発祥地であり、かつ、広大な英語圏形成に影響を与えてきたイギリスの国際社会での位置づけについても解説を加えていく。移民社会、階級社会、また、地域により様々な特質があるイギリスに対する基本的な理解を深めるとともに、多角的視点から国際社会を理解できる能力を涵養することが目的である。	
	中国地域研究	中国は、人口の九割以上を占める漢民族と50以上の少数民族を抱える多民族国家であるだけでなく、同じ漢民族のなかでも地域・気候・方言などにより多様な文化が育まれてきた。本講義では、このような中国の歴史、文化、社会の特質に焦点を当て、現代中国が抱える諸問題について解説を加えてゆく。その際、文化思想、経済発展、少数民族問題、中国現代史における重要事件にも触れる。現代中国の社会問題をより深く理解するために、日本語で読める代表的文学作品やルポルタージュ、インディペンデント映画等も積極的に紹介する。また、台湾の歴史、文化、社会、人々の暮らしやものの見方等についても解説を行なう。中国、台湾に対する基本的な理解を深めるとともに、多角的視点からアジア及び国際社会を理解できる能力を涵養することが目的である。	
	韓国地域研究	「韓国地域研究」では、韓国を主として朝鮮半島における社会の諸問題を、各国別、各地域別の研究であって、特別地域の総合的な理解や他地域との対比をその目的としている研究分野である「地域研究」の観点から考察し、その基礎となる知識を習得することを目指す。このようなことを踏まえ、地域研究の入口ともいえる朝鮮半島の歴史からはじめ、政治、経済、言語、宗教や、日本を含む他国との関係などの現状を探り、朝鮮半島に対する総合的理解を深めることを目的とする。	
	ベトナムの言語と文化Ⅰ	本来、言語と文化は切り離すことができないものである。文化は言語に影響を与え、言語は文化に影響を与える。ベトナム語の基礎を学ぶ際に、その背景にある文化を同時に学ぶことにより、言語の理解をより深いものとする。ベトナム語の特徴を理解するとともに、その語彙、音声、文法の基礎を学ぶ。ベトナム語を表すクック・グーや基本的挨拶表現を学ぶと同時にベトナム人のものの考え方の礎になっているベトナム文化について解説する。ベトナムの文化を学びながら、ベトナム語の基礎を習得することを目的とする。	
	ベトナムの言語と文化Ⅱ	「ベトナムの言語と文化Ⅰ」に続き、ベトナム語の学習とベトナム文化の理解を深める。文化の知識により言語の習得を進めるとともに、言語習得の過程で、より深く文化を理解する。表裏一体である言語と文化を同時に学ぶことによって、ベトナム語の理解をより深いものとする。植民地としての歴史、紛争や2カ国分断の歴史、統一後の社会主義の実情、近代化がベトナムにもたらした影響などにも触れながら、ベトナム語で初歩的なやりとりができるようになること、及びベトナムの文化や事情の理解を深めることを目的とする。	
	タイの言語と文化Ⅰ	タイには年間130万人の日本人が訪れるが、仏教国や微笑みの国というイメージが先行するばかりで、同時代を生きる者としての等身大の理解が不足しており、まずは基本的な知識を深める必要がある。数字や挨拶から簡単な疑問文までのタイ語の初歩とタイ文字の基礎を習得し、スコータイ王朝からバンコク王朝に至る歴史、世界観の基礎をなす上座仏教、バンコクやチェンマイなど主要都市について理解する。これらを通して、タイについての知識を深めるだけでなく、広くアジア地域における言語と文化の多様性を体得することを目的とする。	
	タイの言語と文化Ⅱ	タイ-カダイ語族のタイ系言語は、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーなどで話され、そのうちタイ中部方言がタイ王国標準語のタイ語である。タイ語の学習が目指すのは、経済的な結びつきの高まる東南アジアへの理解の促進だけでなく、欧米語と異なった音韻や文法に触れることで得られる総体としての言語観の刷新である。助動詞や接続詞を用いた複雑なタイ語表現を解説するとともに、ラーマキエンやジャータカなどの物語や、現在の政治・経済動向を解説することで、タイを含む東南アジアの現代社会を総合的に理解することが目的である。	
	インドネシアの言語と文化Ⅰ	本来、言語と文化は切り離すことができないものである。文化は言語に影響を与え、言語は文化に影響を与える。インドネシア語の基礎を学ぶ際に、その背景にある文化を同時に学ぶことにより、言語の理解をより深いものとする。インドネシア語の特徴を理解するとともに、その語彙、音声、文法の基礎を学ぶ。文字の読み方や基本的挨拶表現を学ぶと同時にインドネシア人のものの考え方の礎になっているインドネシア文化について解説する。インドネシアの文化を学びながら、インドネシア語の基礎を習得することを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	インドネシアの言語と文化Ⅱ	「インドネシアの言語と文化Ⅰ」に続き、インドネシア語の学習とインドネシア文化の理解を深める。文化の知識により言語の習得を進めるとともに、言語習得の過程で、より深く文化を理解する。表裏一体である言語と文化を同時に学ぶことによって、インドネシア語の理解をより深いものとする。植民地としての歴史、多民族社会の実情にも触れながら、インドネシア語で初歩的なやりとりができるようになること、及び多様性の中の統一を掲げるインドネシアの文化や事情の理解を深めることを目的とする。	
	国際フィールドワークⅠ (英語圏)	グローバル化社会においては、課題を知識で学ぶだけでなく、現地での調査を通じて実証的に理解することが重要である。この授業では、調査、学習対象を英語圏の国、地域に定め、そこで暮らす人々のものの見方・考え方や課題を学び、現地調査を通し理解を深める。授業は、講義と実習に分け、講義では海外での研修に先立ち、研修実施国の文化や社会などを学び、課題を設定し事前調査を行う。実習では、訪問国、地域の企業や事業体などを訪問したり、現場を見聞きしながら、フィールドワークを行い、知識と実際を結びつけ、国際理解を深めることを目的とする。	実習90 時間 講義30 時間
	国際フィールドワークⅡ (非英語圏)	グローバル化社会においては、課題を知識で学ぶだけでなく、現地での調査を通じて実証的に理解することが重要である。この授業では、調査、学習対象を非英語圏の国、地域に定め、そこで暮らす人々のものの見方・考え方や課題を学び、現地調査を通し理解を深める。授業は、講義と実習に分け、講義では海外での研修に先立ち、研修実施国の文化や社会などを学び、課題を設定し事前調査を行う。実習では、訪問国、地域の企業や事業体などを訪問したり、現場を見聞きしながら、フィールドワークを行い、知識と実際を結びつけ、国際理解を深めることを目的とする。	実習90 時間 講義30 時間
	海外研修	海外での研修を通して、外国の文化・社会、人々などに接し異文化理解を深めるとともに、自文化と他文化を比較することにより、豊かな国際感覚を身につける。海外での研修に先立ち、研修実施国の文化、社会、歴史やそこで暮らす人々の考え方等を学ぶとともに、現地研修では、その国の言語を学ぶことを中心とし、当該外国語の運用能力の向上及び異文化に対する関心を深め、自分とは異なる背景の中で育ち、生活している人々とより良いコミュニケーションを図ることができ、異文化に対する理解を深めることを目的とする。	実習90 時間 講義30 時間
	日本近現代史	19世紀前半から現代に至る日本史を対象とする。その際、主に政治的権力闘争、経済構造の変質とそれに伴う社会的変容、思想や文化の時代的变化、対外関係の推移等、多様な観点からの考察に努めたい。特に豪農の役割の変化、明治憲法下の天皇制国家の成立とその背後のイデオロギー、藩閥と政党との権力闘争、帝国主義国家としての日本の台頭、ワシントン軍縮体制と国際協調主義、都市化の進展、1930年代の軍拡とその後の敗戦、米国の占領政策と東西冷戦の影響、高度経済成長と冷戦後のグローバル化への対応等の分析を目的とする。	
	日本の宗教	日本人のものの見方や考え方の背景に宗教は大きな役割を果たしている。神道と仏教を中心に日本人の意識に影響を及ぼしている日本の宗教の特質について考察をする。宗教とはなにかについて基本的知識を学ぶ。日本の風土で生まれた民族宗教であり、日本の伝統文化の基底をなす神道に対しての理解を深めるとともに、日本人は6世紀に伝来した仏教をどのように受容し、日本の仏教はどのように変遷してきたのか考察する。日本人のものの見方や考え方の背景にある日本の宗教の特質を理解することを目的とする。	
	日本の経済	日本経済の学習は経済のみならず政治、文化、思想、対外関係等に及ぶ日本の全体像理解にも貢献する。したがって、授業では第二次大戦以前から現代に至る経済の考察を通して、日本社会の構造的変化の特質の理解に努める。特に、日本における主要産業の時代的推移、対外貿易の変化、労使関係の変容、科学技術の発展、都市化の進展、主要エネルギー資源の移行、更には世界経済に占める日本経済の役割の変遷に注目する。これらの吟味により、加速する経済のグローバル化の中で、学生が将来に向けて実践的視野を拡大していくことが目的である。	
	日本の政治	現代日本政治を規定する主要因として、我が国の歴史的要因と戦後米国の外交政策が考えられる。歴史的要因として、主に近代以降に形成され今日に至る我が国固有の制度や価値観がある。一方、米国外交の要因とは、敗戦後の米軍を中心とする対日占領政策や東西冷戦を背景とする日米安全保障条約に反映される米国の対日政策である。これらには戦前からの官僚機構が果たす機能の重要性、敗戦による平和主義への希求、防衛面における米国への依存性と経済優先の外交政策等がある。以上を念頭に日本政治の特質とその変遷の考察を目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	現代の日本社会	現代社会は、複雑で我々の理解が及ばないことが多く存在している。日本の社会の系譜を学びながら、現代の日本が直面している課題について考察するとともに、日本の現代社会にある課題をいくつかが取り上げ解説をする。社会学の基礎的な概念について学ぶとともに、日本を取り巻く社会事象について理解を深め、自身と社会の繋がりについて理解する一助とする。日本の社会の変動と課題を学びながら、幅広い視点で日本社会を理解できるようになることを目的とする。	
	パブリックリレーションズ	企業、組織、団体にとってステークホルダー（一般大衆・消費者・取引先・マスコミ・株主・行政・従業員・地域等）と適切な関係を構築することは、複雑化する現代社会において重要である。従来の販売促進を目指す広報だけでは、充分ではなく、幅広く利害関係者と双方向でコミュニケーションができる能力はグローバル化した社会では不可欠である。本講義は、コミュニケーションの基本的な知識を学ぶとともに、パブリックリレーションズの基礎的な概念を習得することを目的とする。	
	仏教文化論	アジア諸国においては、仏教が文化・社会生活の基盤をなしている地域が多い。とりわけ、東南アジア諸国には、仏教の社会生活や価値観への反映が理解されていないと、正しく理解することのできない地域が多い。仏教とこれらの地域の文化、社会との関わり、また、世界観にどのような影響を与えているかについて解説していく。グローバル化社会の中で影響をもたらす宗教文化のうち重要な位置を占める仏教文化に対して、基本的な理解を深めることを目的とする。	
	キリスト教文化論	英語圏をはじめ、ヨーロッパ、中南米においては、キリスト教が文化、社会生活の基盤をなしている。従って、キリスト教の理解なしに、これらの地域を正しく理解することはできない。キリスト教がこれらの地域の文化、社会とどのように関わっているか、また、世界観にどのような影響を与えているかについて解説していく。グローバル化社会の中で影響をもたらす宗教文化のうち重要な位置を占めるキリスト教文化に対して、基本的な理解を深めることを目的とする。	
	イスラム教文化論	イスラム世界をめぐるのは、悲惨なテロ事件など、日頃のニュースでマイナスの情報が多いのが現状である。しかし、実際のイスラム世界は多様であり、人々はイスラムの教えに基いて平穏な暮らしを愛している。世界のイスラム人口は16億人を超え、さらに増加を続けている。このため、グローバル化社会の中で、イスラム教に関する知識は必須のものとなっている。イスラム教と、その背景にあるユダヤ教とキリスト教という一神教の思想の学習を通じて、公正なイスラム理解を得ることを目的とする。	集中
専門 展開 科目 群	英語通訳演習	英語から日本語への通訳、日本語から英語への通訳のために必要なスキルの養成を重点的に学ぶ。特に英語での論法、すなわちアイデアの提示の方法、順序がどのように日本語と異なるかを理解して英語のロジックを修得する。英語特有の口頭表現、日本語特有の口頭表現を解説しながら、場面や形式ごとに通訳のキーポイントについて演習を進める。アテンド通訳、観光ガイド通訳、イベント通訳、会議通訳など実際の通訳シーンに必要な表現とスキルの応用的な演習を行うことを目的とする。	
	ビジネス英語	ビジネスで必要となる英会話を対面形式や電話口でのロール・プレイを交えて練習し、ビジネス特有の表現、イディオムの習得を目指す。またEメールの型についてよく用いられる数種類のフォーマットを学び、基礎から応用までひととおりEメールを書けるようにする。商取引折衝、企業の業務案内等、業務の現場で求められる実用英語について、的確なタームと表現形式を習得することを目的とする。即戦力としての英語力の習得と業務の前線で活躍し得る能力の育成を目的とする。	
	英語プレゼンテーション	英語のプレゼンの基礎である論理の構成を理解し、英語のパターンに従ったプレゼンとはどのような形式をとるものなのかを学ぶ。演繹的に主張を示した後で、支持文で理由づけをおこなうパターンを習得するとともに、論理を明示するつなぎことばを使いながら、企業の業務紹介、新商品の広報、新規事業の展開及び日本の文化や社会などについて、効果的な視覚資料を作成し、的確なプレゼンテーションができるように実践する。即戦力としての英語力の習得と情報発信力の育成を目的とする。	
	英語科指導法 I	日本の英語教育現場では、従来の文法や訳読を中心とした形式重視の指導法から、コミュニケーションやタスクを中心とした機能重視の指導法に転換しつつある。本授業では、主として学習指導要領に基づき、小中高の教育目標、内容を概観し、優れた授業実践を観察する。その後、グループワークや討議を経てよりよい授業について考察を深める。最終的にグループで考察した機能重視型の授業を試行する。それらを通して、教育実習のための授業観察、および授業実践における基本的な実践力を習得することが目的である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語科指導法Ⅱ	「英語科指導法I」で概観した諸側面の英語指導技術を統合し、一貫した授業を行う。具体的には、実際の中高の教科書を使用して、コミュニケーション能力を育成する観点で一授業全体を計画し、準備し、実践する。模擬授業は授業者、生徒役、授業観察者の役割に分かれて運営を行う。事後にこの個々の模擬授業に関連する理論的背景を紹介し、理解を深める。またタスク活動やテスト問題等を実際に作成する。それらを通して、中学校・高等学校で教育実習を行う上で必要となる全体的な英語授業構成力、および実践力を習得することが目的である。	
	日本のものづくり	明治維新後、極めて短期間に欧米先進国へのキャッチアップを果たした日本のものづくりは、経済のグローバル化が進む今日においても、その優位性と特殊性は際立っている。本科目は、世界的に高く評価されている日本のものづくりについて、特にトヨタ自動車など愛知の事例を中心に、歴史的・技術的・地域的な発展の系譜、人材の育成と技能の継承、チームワークや労使協働など利他主義に基づく経営文化などを解説し、日本のものづくりの特徴を正しく理解するとともに、将来、企業のグローバル経営に貢献しうる人材の育成を目的とする。	
	日本のツーリズム	日本のツーリズムは、内外からの交流人口の増加に伴い、地域の持続的発展の牽引力としての重要性を増している。世界では持続可能な観光地経営のための指標開発が国連組織を中心に推進されている。日本では国際的に競争力のある観光圏の整備や着地型観光の促進がなされている。こうした取り組みを踏まえ、日本のツーリズムの実態と政策的課題について解説していく。日本のツーリズムに対する基本的な理解を深めるとともに、世界の動向も視野に入れた持続可能なツーリズムのあり方についての洞察力を養うことを目的とする。	
	国際関係論	19世紀末の帝国主義の時代から東西冷戦後に至る国際関係を、主に経済力、軍事力、文化及び思想の対外波及力を通して分析する。その際、帝国主義における勢力圏外交、ウイルソニアンの国際平和主義、総力戦としての第二次世界大戦、東西冷戦、冷戦後の経済のグローバル化等を上記の三つの観点から分析し、国際関係の変化について考察する。また第二次大戦後の日本外交に関しては、その対日影響力の重要性に鑑み対米関係により注目したい。最終的には明晰かつ汎用性に富む国際関係分析枠組の把握を目的とする。	
	国際経済論	貿易に背を向けて経済成長した国は無いが、多国間の貿易が進展すると、それぞれの経済に大きなチャンスがもたらされる一方、他方では調整が必要になる。それはなぜか。また海外に企業が進出し、あるいは選択的に海外から資本を受け入れ、国々の経済はより高い経済発展をとげ、商品、資金、技術、人間の移動の国際化は大きな成果を上げた。しかし、発展と同時にそれぞれの国内と国々の経済諸関係に様々な課題が発生している。これらの問題や課題を理解する能力を養うことを目的とする。	
	近現代の日中関係	古来から隣国として密接な関係を築いて来た日本と中国との関係について、時代を近現代に絞り、その時々における両国の国内事情や国際情勢を踏まえながら、両国間で生じた諸問題を取り上げ解説をしていく。また、その問題の発生要因と問題解決の方策が、その後の日中関係にどのように反映しているかについて解説を加える。近現代の日中関係について基本的理解を深めるとともに、多角的視点からアジア及び国際社会を理解できる能力を涵養することが目的である。	
	近現代の日韓関係	古来から隣国として密接な関係を築いて来た日本と韓国・朝鮮との関係について、時代を近現代に絞り、その時々における両者の国内事情や国際情勢を踏まえながら、両者間で生じた諸問題を取り上げ解説をしていく。また、その問題の発生要因と問題解決の方策が、その後の両者の関係にどのように反映しているかについて解説を加える。近現代の日韓・日朝関係について基本的理解を深めるとともに、多角的視点からアジア及び国際社会を理解できる能力を涵養することが目的である。	
	アセアン事情	以前、先進国に対して原料提供国としての役割が注目されていたアセアン諸国は、70年代頃から外国投資受け入れに積極的な姿勢を見せ始めた。さらに、80年代の急速な円高ドル安傾向に伴い、これらの国々に対して日本を含む多くの先進国から多額の外国投資・企業移転が行われ、アセアン地域の国々は原料提供国から最終製品の生産国として位置づけられるようになった。当授業では、アセアン地域から代表的な国々を事例に取り上げ、経済及び産業開発の面から見て、これらの国々の開発に関する理解を深めることを目的とする。	
	南アジア事情	日本から見ると、南アジアの国々は「近くて遠い存在」だと言って良いであろう。日本や周辺の国々と比べ低所得者が目立ち、生活環境、食文化、価値観なども大きく異なっていることや、治安が悪い国も多く、仕事や観光を目的で気楽にいけそうも大きく思われる理由があったと言える。しかし、最近では、これらの国々の状況は大きく変化してきており、日本はこの地域と交流を深める必要があると考えられる理由は多く見られる。この授業では、文化・社会的な側面だけでなく、ビジネスの面でも日本との関わりを持つことができる側面を中心に、南アジア諸国に対する理解を深めることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ヨーロッパの文学と社会	文学作品を通してヨーロッパの社会を理解する。文学は作り手としての作家、受け手としての読者が時代によって変化することによって大きな実質的な変貌を遂げてきた。ヨーロッパの文学を主導してきたフランスを中心に代表的な作家やその作品を取り上げ、それぞれの作品が生まれた時代背景を踏まえながら作品の背後にある社会の在り方、美術、音楽、宗教などに目を配り、時代の思潮を踏まえながら、ヨーロッパの文化やヨーロッパに暮らす人々のものの見方を理解することが目的である。	
ゼミナール科目群	基礎演習Ⅰ	高校までの受け身の勉強から、大学での主体的な学びを身につけ、大学生としての自覚を持たせるための導入教育である。学生生活や学習の時間管理、自己管理能力を身につけることを主眼に置き、基本的な受講態度や望ましい学習習慣の形成はもとより、ノートの取り方、レポート・論文の書き方、資料の探し方、文献の読み方など、大学において必要となる基礎的なスキルを修得するとともに、大学での学習の方向を定めることを目的とする。	
	基礎演習Ⅱ	大学で必要とされる能力やアカデミックスキルを、文献や現場における調査、発表、討論などを通じて身につけるとともに、多様な考え方や物の見方があることを学ぶ。そして、フィールドワークに関する基礎的知識を身につけ、大学周辺地域の様々な問題やその解決方法などを学習する。また、大学生活において生じた問題などを取り上げ、その解決の方法を見出すことを支援する。学生の自主性を重んじ、アドバイスをを行い学生が主体的に学ぶ力を身につけることができるように導くことにより自律学習の礎を身につけることを目的とする。	
	基礎演習Ⅲ	これまで学んだアカデミックスキルを発展させるために、座学で得られた知識を実証的に理解するためのフィールドワークを行う。フィールドワークでは、主としてグローバル化をキーワードとした地域の様々な課題を発見し、その解決方法などを考える。調査テーマの設定方法、どこで何をどのように調べるか等の調査内容の設定の仕方や方法を学ぶことにより、新たな課題を見出す能力、解決への手がかりを探る力を養うとともに、調査対象についての情報の入手の仕方を学ぶことにより、調査活動に必要な資料収集能力を養うことを目的とする。	
	基礎演習Ⅳ	現地調査を行う際の、現場での情報収集能力や現地の人から情報を得るコミュニケーション能力の育成を目指し、フィールドワークを積極的に授業に取り入れる。グローバル化に関する地域の課題を発見し、フィールドワークを通して地域とともにそれらの解決方法などを考える。また、現地で収集した情報を適切に整理することによって、分析力を身につけるとともに、調査内容の発表やレポートの作成を行うことによって、現地調査で得られた情報の分析、考察に基づいた報告書作成能力やプレゼンテーション能力を養うことを目的とする。	
	ゼミナールⅠ	これまでの大学生活で身につけた学問の基礎を踏まえ、専門知識や技能を身につけるために、文献や現場における調査、発表、討論を中心とした主体的かつ双方向の学びを基本とする授業である。その学習の過程において、コミュニケーション能力や協調性、プレゼンテーション能力を養う。教員や他の学生との対話や議論を通じ、自律的に学び、教員は研究のテーマを定めることができるように支援するとともに、それに必要な文献や資料の紹介や研究、分析の仕方などについてアドバイスをする。また、国内だけでなく、外国を視野に入れたフィールドワークの実施の仕方を学ぶ。研究テーマを見出し、主体的学習を進めることが目的である。	
	ゼミナールⅡ	研究テーマに関する資料を集め、その分析を進める。グローバル化の進展に伴う社会の課題解決を目指し、国内だけでなく外国を視野に入れたフィールドワークを行い、その成果のプレゼンテーションの仕方を学習する。また、他の学生のプレゼンテーションや考えを聴きながら、学生同士切磋琢磨し、論理的、批判的な思考法や物事を多面的に見る力を養うことで、洞察力や専門的知識を深める。教員は、研究の進捗状況を確認しながら、適切にアドバイスをする。社会人基礎力を身につけながら、研究を進め、大学生活の集大成に繋げることが目的である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ゼミナールⅢ	<p>大学生生活の総まとめである卒業論文作成を目指し、学生各自が定めたテーマについて集めた資料の整理、分析を基に研究を深める。文献や国内外をフィールドとした現場における調査、発表、討論を中心とした学生の主体的学習が基本となる。教員は課題の達成度を確認しながら、学術論文の作成の仕方についてアドバイスをし、研究成果が最大限となるよう学生を導く。専門的知識を深めながら、分析力、洞察力、コミュニケーション力等の養成をするとともに、研究成果の充実を目指すことが目的である。</p> <p>(1 K. K. U. Ananda Kumara) 国際開発の面から見るアジア社会をテーマとし、様々な開発指数をもとに、アジア社会の現状と将来の見込みについて指導を行う。</p> <p>(2 藤田 衆) フランスを中心とするヨーロッパの文化、社会についてこれまで学んできたことを取り上げ、どのような点が今まで欠落していたか、さらにどのような点について新たに調べられるか考えるという課題の指導を行う。</p> <p>(3 村田 泰美) 語用論および社会言語学的データ収集の手法を用いて、英語または日本語の使用状況の実態に関する分析の指導を行う。</p> <p>(4 堅田 義明) 日本と太平洋地域の関係を各自の関心に即し、貿易・軍事・移民・文化交流等の観点から収集資料の分析指導を行う。</p> <p>(5 二神 真美) 比較社会文化論の分析手法を用いて、アメリカ地域の多文化共生の実態を調査し、現代アメリカ社会が内包する地域格差と再生の課題について指導を行う。</p> <p>(6 岩井 眞實) 比較演劇学の手法を用いて、古今東西の演劇における時間・場所・筋・人物・テーマ等戯曲構造の諸要素に関する比較分析を行い、これらに共通する作劇法を探究するための指導を行う。</p> <p>(7 西尾 由里) 日本人の英語の聞き取りや発音の問題点を子供と大人の言語習得理論から学び、科学的な実験計画法の手法の基礎を使い、効果的な習得方法論を開発する指導を行う。</p> <p>(8 呉 大煥) 地域研究（主に朝鮮半島地域）、言語教育論、異文化間教育等の手法を用いて、朝鮮半島を中心とした地域研究や言語教育と関わる異文化間理解、多言語多文化社会、言語と社会などに関する課題の指導を行う。</p> <p>(9 津村 文彦) アジアでの文化人類学の手法を活用しながら、現実社会に即応した論文のテーマと構成について指導を行う。</p> <p>(11 柳沢 秀郎) 卒業論文として扱うアメリカ作家、文学作品の選定に関して助言をし、さらに分析の手法、視点などの指導を行う。</p> <p>(12 松浦 周子) 中国文化圏に関する各自のテーマについて、先行研究を確認し、収集した資料やデータの整理と分析、及び新たな問題点の発見を課題として指導を行う。</p> <p>(13 藤原 康弘) コーパス言語学の理論的背景を学ぶとともに、英語教育への研究的、教育的応用に関する指導を行う。</p> <p>(16 宮崎 新) 社会や人間関係におけるコミュニケーション的事象を取り上げ、質的手法を用いて批判的に検証・考察するための指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ゼミナールⅣ	<p>大学生生活の集大成として研究成果を卒業論文に仕上げる。これまでの研究を通じて修得された分析力、洞察力、コミュニケーション力、専門的知識等を基に、個々の課題がどこまで達成されたかについて詳しく確認しながら、卒業論文の完成を目指す。卒業論文の内容向上のため、研究成果の報告、発表、討論に重点を置いて演習を行う。調査、研究に加え、学生同士の議論や質の高い論文を作成するための教員の助言を基に研究成果の仕上げをし、生涯にわたり主体的に学ぶ力の涵養を目的とする。</p> <p>(1 K. K. U. Ananda Kumara) アジア諸国を中心に超国家企業と地域開発をテーマとし、東南アジア、南アジア及び東アジアの国々において超国家企業が与えている影響についての分析を通し卒業論文を纏めるための指導を行う。</p> <p>(2 藤田 衆) フランスを中心とするヨーロッパの文化、社会に対する日本人のかかわり方を取り上げこれからの日本がどのようにヨーロッパと接し、学んでいくものや逆に伝えていくものなどを考えるという課題の指導を行う。</p> <p>(3 村田 泰美) 英語または日本語の使用状況の実態に関する分析から、語用論および社会言語学の理論的枠組に沿って得られる結論に関する指導を行う。</p> <p>(4 堅田 義明) 日本の歴史に対する知見と国際社会への視野を育み、そこから各自が将来への実践的行動指針を抽出する指導を行う。</p> <p>(5 二神 真美) 比較社会文化論の分析手法を用いて、アメリカ地域の多文化共生の実態を調査し、現代アメリカ社会が内包する地域格差と再生の課題について指導を行う。</p> <p>(6 岩井 眞實) 比較演劇学的手法を用いて、古今東西の演劇における時間・場所・筋・人物・テーマ等戯曲構造の諸要素に関する比較分析を行い、これらに共通する作劇法を探究するための指導を行う。</p> <p>(7 西尾 由里) 日本人の英語音声の知覚と産出の問題点と習得のメカニズムを学び、科学的な実験計画法を立て、データを採取分析し、効果的な習得方法論を開発する指導を行う。</p> <p>(8 呉 大煥) 地域研究（主に朝鮮半島地域）、言語教育論、異文化間教育等の手法を用いて、朝鮮半島を中心とした地域研究や言語教育と関わる異文化間理解、多言語多文化社会、言語と社会などに関する課題の指導を行う。</p> <p>(9 津村 文彦) 現代社会の文化的諸実践をめぐる問題群に対し、文化人類学的視点を踏まえ、論文完成に向けた指導を行う。</p> <p>(11 柳沢 秀郎) アメリカ文学作品を扱った卒業論文の完成を目標に、各学生のテーマに即した参考資料の紹介、論文構成、表現方法など論文を書く上での具体的な指導を行う。</p> <p>(12 松浦 周子) 中国文化圏に関する各自のテーマについて、新たな問題点を掘り下げ、客観的かつ論理的に自らの見解を論述することを課題として指導を行う。</p> <p>(13 藤原 康弘) コーパス言語学の理論的背景を学ぶとともに、英語教育への研究的、教育的応用に関する指導を行う。</p> <p>(16 宮崎 新) 社会や人間関係におけるコミュニケーション的事象を取り上げ、質的手法を用いて批判的に検証・考察するための指導を行う。</p>	